

小さき兄弟会

召命の司牧的配慮のための  
オリエンテーション

# 「来て、見なさい」

(ヨハネ1:39)



養成学問担当総本部事務局

ローマ、2002年



## 目次

ACRONYMS AND ABBREVIATIONS	4
政令	5
プレゼンテーション	6
本文書の目的	6
オリエンテーションの基本的信念	8
召命司牧が今日私たちに突きつける課題	11
召命司牧の分野におけるいくつかの優先事項	13
序文	15
小さき兄弟会における召命司牧の現状	17
現状を振り返って	17
召命の状況に対する反応	19
志望者の現在の状況	20
小さき兄弟会における召命司牧の諸原則	23
O F Mにおける召命の司牧的配慮の意味	23
福音宣教における召命司牧と青年司牧の奉仕職	24
初期および生涯養成における召命司牧	26
方法：召命司牧のためのオリエンテーションから企画立案まで	28
方法	28
人間学的、神学的領域	29
フランシスカンの召命の旅路：いくつかの重要な特徴	31
降ろすべき三つの網	34
養成の網	34
具体的な目標	35
識別の基準	37
質問	41
提案	41
福音宣教の網	42
具体的な目標	43
質問	47
提案	47
兄弟愛の網	48
具体的な目標	49
質問	51
提案	52

## ACRONYMS AND ABBREVIATIONS

### Sacred Scripture

Jn	The Gospel according to St. John.
Lk	The Gospel according to St. Luke.
Mt	The Gospel according to St. Matthew.
IS	The First Book of Samuel.

### Other acronyms

CFL	<i>Christifideles Laid</i>
DVP	<i>Development of Vocational Pastoral Activity in the local Churches</i> , CIVCVSVA, 1992.
EN	<i>Evangelii Nuntiandi</i> , Apostolic Exhortation of Paul VI, 1975.
ET	<i>Evangelica Testification</i> Paul VI.
FC	<i>Familiaris Consortio</i> .
FE	<i>Fill the Whole Earth with the Gospel of Christ</i> , Pentecost Letter of Br. Hermann Schaluck, 1996.
FLC	<i>Fraternal Life in Community</i> , CIVCVSVA, 1996.
FRV	Fraternity for Reception of Vocations.
GGCC	<i>General Constitutions, 1987</i> .
GS	<i>Gaudium et Spes</i> , Pastoral Constitution of the II Vatican Council, 1965.
IVT	<i>"In Verbo TMO..."</i> , Instrumentum Laboris of the International Congress for PCV, Assist, 2000.
LG	<i>Lumen Gentium</i> , Dogmatic Constitution of the II Vatican Council, 1964.
LGB/FD	<i>The Lord Gives Me Brothers</i> , Final Document of the Congress of PCV, Assist, 2000.
MR	
NMI	<i>Mutuae Relationes</i> , CIVCVSVA, 1978.
NVNE	<i>Novo Millennia Ineunte</i> , Apostolic Exhortation of John Paul II, 2000.
OF	New Vocations for a New Europe, Pontifical work for Church vocations, 1997. <i>Ongoing Formation in the Order of Friars Minor</i> , Document of the General Secretariat for Formation and Studies, 1995.
OrPCV	
OT	<i>Orientations for the Pastoral Care of Vocations</i> , 2002.
PAY	<i>The Order Today</i> , Letter of the Minister General, Br. Giacomo Bini, ofm, 2000.
PCV	Pastoral Activity with Youth.
PDV	Pastoral Care of Vocations.
PI	<i>Pastores dabo vobis</i> , Apostolic Exhortation of John Paul II, 1992. <i>Potissimum Institution</i> "Instruction on formation in Religious Institutes", CIVCVSVA, 1990.
PrS	
ReM	<i>Priorities for the Sexennium</i> , Definitory General, 1997.
RFF	<i>Redemptoris Missio</i> , Encyclical Letter of John Paul II, 1990.
TestC	<i>Ratio Formationis Franciscanae</i> , 1991.
VC	<i>Testament of St. Clare</i> . <i>Vida Consecrata</i> , Apostolic Exhortation of John Paul II, 1996.

ジャコモ・ピニ、OFM  
小さき兄弟会の総長にして  
主のいやしき下僕

## 政令

兄弟共同体と兄弟各人が、「フランシスカン・カリスマに関心を示す人々を歓迎し、それによって彼らが『来て、見なさい』(Jo 1,39)というイエスの招きに従って、一つの具体的人生計画を見出す」(RFF 106)のを助けるために、会憲の指令(GGCC 144-147参照)と召命の司牧的配慮に関する教会の文書とに基づき、2002年1月17日に開かれた総理事会の評決の上で、総則の規定(art. 67,1-3参照)に従い、私たちに委ねられた権限を行使し、本政令をもって、

### *召命の司牧的配慮のためのオリエンテーション* *「来て、見なさい」(Jn 1:39)*

を發布し、公布されたことを宣言し、それが本兄弟会全体に効力を持つことを宣言します。

また、すべての管区と構成単位が、本書に含まれる指令に基づき、それぞれの状況や条件に応じて、独自の「*召命の司牧的配慮のためのオリエンテーション*」を作成する義務を有することを宣言します。それは、召命の告知と提示(RFF105参照)および適切な識別と同伴によって、志望者が自らの召命を識別し、ひとつの生き方の選択にたどりつくためです(RFF107)。

ローマ、総本部にて  
2002年1月25日、使徒聖パウロの回心の日に  
Prot. N. 091725 (025/02)

総長 兄弟ジャコモ・ピニOFM

兄弟 ホセ・ロドリゲス・カルバリヨOFM  
養成学問担当総本部事務局長

## プレゼンテーション

養成学問担当総本部事務局は、2000年10月7日から30日にわたり、アッシジの天使のマリア聖堂において本会全体のPCV（召命の司牧的配慮【訳注：以下、「PCV」を「召命司牧」と略す】）のアニメーターのための国際会議を開催しました。会議に寄せられた大量の回答と会議に出席された召命司牧アニメーターの意見は、会議の総括文書「主は私に兄弟たちを与えてくださる」に反映されています。この文書の中で、養成学問担当総本部事務局長は召命司牧のための管区プロジェクト立案の基礎となる*召命司牧のためのオリエンテーション*の作成を依頼されました。

総理事会は本会議のこの提言を受け入れ、かかるオリエンテーション作成のために、特別委員会（ad hoc Commission）を任命しました。この委員会の構成員は、養成学問担当総本部事務局長ホセ・ロドリゲス・カルバリョ、副事務局長Ernest Siekierka、ローマ（イタリア）の聖ペトロ・パウロ管区のマッシモ・フサレリ、カトビーツェ（ポーランド）の被昇天の聖母管区（Province of the Assumption of the B.V.M.）のセルジオ・バルディガの四名です。委員会は任務遂行に当たり、他の兄弟たちの協力を得ました。総理事会は1月17日の会議で、総括文書を承認し、総長は同月の25日に署名済みの政令をもって、*召命の司牧的配慮のためのオリエンテーション「来て、見なさい」*（*Jn.1,39*）と題する文書を承認し、発布しました。ここにそれをご紹介します。

### 本文書の目的

*召命司牧のためのオリエンテーション「来て、見なさい」*（*Jn1,39*）は、教会および本会における召命のための司牧活動に関する最近の反省事項をできるだけ織り交ぜて作成した文書です。特に、「主は私に兄弟たちを与えてくださる」（*The Lord Gives Me Brothers*）および召命司牧アニメーターの会議中に検討された事項と会議の準備文書 *In Verbo Tuo* を考慮に入れています。

こうした反省事項と多くの召命司牧アニメーターの体験を考慮に入れ、タイトルが示すように、また、召命司牧会議の要請に基づき、*召命司牧のためのオリエンテーション「来て、見なさい」*（*Jn 1,39*）は次のことを提案しています。

*召命司牧のための管区プロジェクト*（*OrPCV 10*参照）を作成し、青年

と働くための特別プロジェクト（*OrPCV9*参照）の基礎を敷くのに助けとなる方法を提供すること；

召命司牧のいくつかの根本原則を明らかにすること。そのためには、本会における召命司牧の意味を明らかにし、会憲を心に留めた上で（*OrPCV7*参照）、召命司牧と福音宣教や青年司牧活動との緊密な関係（*OrPCV 8-9*参照）、および召命司牧と初期および生涯養成との関係（*OrPCV9*参照）に目を向けること；

人間学的・神学的要素（*OrPCV11-12*参照）を指し示すと同時に、兄弟たちの召命に関する仕事を支え、励まし、動機付けるはずのフランシスカンの召命の旅路の重要な要素（*OrPCV13-14*参照）を指し示すこと；

人間として、キリスト者として、フランシスカンとしての成熟における召命の識別のための基準を指し示すこと（*OrPCV17*参照）；

福音宣教の分野（*OrPCV19*参照）および兄弟共同体の分野（*OrPCV21*参照）における召命司牧の一般目標および具体的目標を指し示すこと；

兄弟共同体および召命司牧に携わるすべての人に反省を促すこと。*召命司牧のためのオリエンテーション「来て、見なさい」(Jn 1,39)*は、この目的のためにいくつかの質問と提案を行なっています（*OrPCV 20,22*参照）。

したがって、本会の召命司牧プロジェクトをつくることは考えていません。召命司牧に関わっている兄弟たちの社会・文化的な状況が多様であることを考えると、そのようなプロジェクトの実現は困難に思えました。しかも、召命司牧をそれぞれの地域文化の中にとけ込ませる必要を考えると、総括プロジェクトは適切なこととも思われませんでした。このような理由から、この文書自体が「不完全な道具とならざるを得ないこと」（*OrPCV 10*）を私たちは認識しています。召命司牧プロジェクトの具体化は管区レベルでなされるべきものであり、企画立案に際しては管区のできるだけ多くの兄弟が参加するべきです（*OrPCV 10*）。いずれにしても、*召命司牧のためのオリエンテーション「来て、見なさい」(Jn1,39)*には、本会のすべての管区が召命司牧のために働くに当たり考慮すべき貴重な要素が少なからず含まれていると信じています。

## オリエンテーションの基本的信念

召命司牧アニメーターの大半の賛同を得た信念がいくつかあり、それらはこの文書に何度か出てきますので、ここにその原則をご紹介します。

召命司牧は司牧活動と密接な関係にある

すべての司牧活動はその性質上、召命の識別を目指すものであり、その識別における最終目標は、信仰者が神に召し出された人生計画の実現に向けて具体的な道筋を発見できるよう助けることです。召命のために働くことは、教会におけるあらゆる福音宣教活動と司牧活動のまさに精髓です。実際に、召命のために誠実に働くならば、信徒は日々の主の呼びかけに敏感になり、自分の召し出しを自覚することができ、「召命の恵みを生きたものとする自由で自発的な惜しみないこたえ」(VC64)をすることができるようになります。

したがって、「召命司牧のための召命司牧ということがあってはなりません。召命司牧には福音宣教と司牧活動との緊密な連携が必要」(OrPCV8)であり、特に家族の司牧活動は重要です。それは、両親が自分たちの子どもの召命を促進する最初のアニメーターとしての責任を果たし、自由な気持ちで、子どもたちが今日召命の前に立ちただかる障害物、たとえば、利己的、快樂主義的、功利主義的、打算的、権力志向的考え方を乗り越えるのを助けることができるためです。

今日の召命司牧においては、今まで以上に単に「狙い撃ち」的に会員を募るやりかたや、「安易で賢明さを欠く会員募集活動」(VC64)に陥らないことが求められています。私たちのような文化においては、私たちのもとにやってくる青年たちのことを考えると(OrPCV6参照)、召命の提示(vocational proposal)をしっかりとした基礎に、つまり適切な要理教育、教会に関する堅実な理解、そしてあらゆる召命を神の民の中に認める修道生活の捉え方の上に置くことが必要です(OrPCV8参照)。

召命司牧の最も適切な「腐葉土」は青年との司牧活動(PAY)である

【訳注：以下、「PAY」を「青年司牧」と略す】

教会においても本会においても、青年司牧と召命司牧は相関関係にあるとの考え方が一般的です。青年司牧に召命の側面が取り入れられる時にのみ青年司牧が完全であり、効力を持つとするならば、召命司牧は青年司牧という場の中にこそ生かされるということになります(RFF144参照)。

あらゆる司牧活動、特に青年のための活動が、召命に関わるものであり、召命というものが他のあらゆる司牧活動の頂点をなすとするならば、「会に



とって、聖霊の働きを助けるもっとも真正な方法は、その最高の力を惜しみなく召命のための活動に投じること、とりわけ青年の司牧に熱心に献身することです」(VC 64)。召命司牧は原則として、青年司牧に依存し、青年司牧から生まれ、そして一般的に青年司牧なしには発展することができません。他方、青年司牧は、召命の側面に取り入れられる時にのみキリスト教的な意味で養成されて行くのです。したがって、「神学的・司牧的見地からこの二つの活動、つまり召命司牧と青年司牧が、洗礼によってすべての信徒を結びつける一つの召命および使命に根ざしているのですから」、本書は、「召命司牧が青年司牧と独占的ではないにせよ、特別な関係にあること」を私たちに思い起こさせます(OrPCV召命司牧 8)。

この原則には青年司牧と召命司牧に関して明らかな結論が付随します。青年司牧は召命の側面が結果として来るものでもなければ、少数の人のためのものでもなくて、青年司牧の主たる対象である青少年の福音宣教と信仰教育の全プロセスにわたり存在するものであることを認めなければなりません。また、召命司牧は聖霊が各人にお与えになる賜物を深く尊重すると同時に、福音宣教と信仰教育に対しても特別な注意を払わなければなりません。それは召命司牧がまことの信仰の旅路となり、キリストとの個人的な出会いへと導くような方法で行われるべきです。

#### 召命司牧においては祈りがもっとも重視される

召命司牧に携わる兄弟の間で、「召命のための祈りは召命司牧において中心である」という信念がこのごろ支持を得ています。召命のための祈りは、「多くの仕事の一つに過ぎないものでは決してなく」(OrPCV 12参照)、召命のために行ない得る第一の、そしてかけがえのない仕事です。召命が神からの賜物であるとするならば、神の呼びかけは祈りの中ではじめて聞こえるはずです。

召命司牧の中で祈りが占めるべき適切な場を考えると、「霊性神学は、召命のために祈る理由と方法をよりよく理解するのを助けるものでなくてはなりません」(OrPCV 12)。この意味で、召命のための祈りは安易な問題解決の方法ではないことをはっきりさせる必要があります。問題解決策としての祈りは本当の祈りではありません。召命のために祈るとは、まず召命を求め、促進し、誘発しようとして試みることです。召命のために祈ることはまた、神の呼びかけを聞くことを可能にし、容易にするような場をつくることでもあります。召命のために祈るとは、「より忠実に」(GGCC 1参照)従うようにと絶えず私たちを招いてくださる主にいつも心を向けることでもあります。

このように考えると、召命司牧全体の聖書的・マリア的側面、および召命の旅路のための恒久的な学校としての典礼暦、特にフランシスコ会の祝日の重要性を強調することが必要と思われまます。

## 召命司牧はまことの養成段階

養成について述べた会憲の第7章に召命司牧に関する記述がみられますが、そのことは、次の3点がもっとも重要であることを示しています。

召命司牧はその本来の性質上、養成の中心テーマであり、課題である；

召命司牧は独自の形態と養成の旅路を持っており、それは、養成一般がそうであるように、養成途上にある者の全人格的な成長過程と関係がある；

召命司牧のアニメーターは、養成担当者と同様に、養成途上にある者の全人格的な成長過程に参加しなければならない。

本書は、召命司牧を養成段階に組み入れたという点で、本会の他の文書よりも先んじています。「召命司牧は、生涯養成とのつながりを持つ初期養成のプロセスの不可欠の部分形成しています」( *OrPCV*9)。したがって、召命司牧には3つの基本的な時期があります。すなわち、召命の告知(annunciation of the vocation)、召命の提示(vocational proposal)そして召命の識別です。そのいずれも、同伴という方法によって行なわれなければなりません。

召命司牧が今日抱えている複雑な状況を考えると、アニメーターは適切な準備を整えることが求められます( *OrPCV* 9参照)。それは、「召命という福音を告知し」、「召命についての紹介・指導を行なう」(make a courageous proposal)ことができるだけでなく、自分の人生について疑問をもつ者がいればその者と同伴することができるためです( *Lk*24,13ss参照)。つまり、彼が心の中に抱えていることを引き出すことによって教育し( *Lk*24,17-19参照)「御父に向かうキリストの心にしだいに形づくられていく道」( *VC*65)を歩み始めるように養成し、一つの生き方の選択にたどりつくことができるように、また、もしも召し出しを感じたならば、私たちの生き方を自由に選び取ることができるように識別の過程において彼を助けることなのです( *RFF*107)。

また、本書はこの過程において生涯養成が果たす役割を明確に述べています。それによれば、「生涯養成が養成のプロセスの重要な環境となることを私たち小さき兄弟がはっきり自覚した時に初めて、若者たちのための信頼で

きる教育・養成計画を立案することができます。自分が受けた召命の賜物をはっきり自覚した兄弟共同体は、召命の発信地となり得、聖フランシスコの福音的な直感を維持するだけでなく、促進し、さらに、未来に向かってフランシスカン・カリスマの新しい展望を開くことができます」(OrPCV9)。

### 召命司牧が今日私たちに突きつける課題

召命の危機を乗り越えるためには、とりわけ、私たちの生きている時代にふさわしい召命の提示(vocational proposal)を行なうためには、戦略を変える必要があります。特に、この現実に取り組み、召命司牧を実践する態度を変えることが必要です。

召命司牧を実践する際の基本的な態度、特に本書で勧める態度とは次のようなものです：

信頼。召命を求めるに当たり、また、召命司牧の「職務」を遂行するに当たり、主に信頼する心が不可欠です(Mt 9, 35-38参照)。今の状況では可能性はほとんどないという思い込みを克服する必要があります。すべての召命は心の中で生まれますが、人間の心を支配されるのは神です。「私たちは主イエスを信頼しなければなりません。イエスはご自分に従うよう男女を招き続けているからです」(VC 64)。私たちに不可能と見えることも、神には不可能ではありません。「神にできないことは何一つない」(Lk 1,37)のです。今は「未来への約束に満ちた」独特で濃密な時(kairos)です。神の霊が今日も働き続けておられるので、歴史のどの瞬間も「神の時間」なのです(OrPCV 2参照)。

明晰さ。適切な召命の提示の(呼びかけを行なう)ためには、私たちを取り巻く世界と人々の感情、考え、生活を鋭敏かつ明晰に見つめることが大切です。特に若者たちの世界をよく知る必要があります(OrPCV6参照)。私たちが今、召命を提示して(呼びかけて)いるのはどのような世界なのでしょう？どのような若者たちに召命を提示して(呼びかけて)いるのでしょうか？どのように、なぜ、そうしているのでしょうか？若者たちは私たちに「明確な提示(呼びかけ)」、勇気ある提示(呼びかけ)(VC 64参照)を求めています。しかし、そのように明確な提示(呼びかけ)になるには、その提示(呼びかけ)は神からのものであり、召命司牧の働き手は仲介人に過ぎないということを、若者がたやすく感じ取れる必要があります(1S3)。また、その提示(呼びかけ)は私たちの必要にではなく、彼の必要に対する応えでなくてはなりません。私たちの好きな価値観に応えるものではなく、フランシスコの召命の体験の基礎になっていた福音的価値観に応えるものでなく

てはならないのです。明晰さは徹底主義（radicalism）と関連しているということも忘れてはならないでしょう。福音的・フランシスカンの価値を生き抜く上で、また、召命を提示する（vocational proposal）上で徹底主義と激しさがなければ、召命について話をしても、「自分の召命を識別し、ひとつの生き方の選択にたどりつきたい」（*RFF* 107）と願う若者の心に歩み寄るのは難しいでしょう。

信念。今日の若者に「ついて来なさい」と呼びかけるには、大胆さが必要ですが、この大胆さは預言者イザヤのように「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」（*Is* 6,8）と応えられる信念と生活の証しから生まれるものです。言葉ではなく、生活を通して「主イエスというかたの魅力と福音のために自らを完全にささげることの美しさ」（*VC* 64）を示す時に初めて、また、「キリストに従うことのすばらしさとそれを達成させるカリスマの価値を明らかにする」（*VC* 66）時に初めて、私たちの召命の提示が「召命を求めているキリスト者にとって主要な魅力」（*GGCC* 145,1; *RFF* 104）となるのです。自分の召命をまじめに生き抜こうと心から望む人だけが、すなわち、「集中的で継続的な祈り、深い兄弟愛に満ちた生活、最も貧しい人々と分かち合う真の小ささ、明確で勇気ある福音宣教、まじめで適切な養成」（*OrPCV* 13）を実践する人、私たちのカリスマの美しさを示すだけでなく、それを体験することのできる人だけが、新しくて有効な召命司牧が生まれる「腐葉土」を作ることができるのです。

召命に気づく。すべての召命は、私たちの生活の中に入って来られ、ご自分のまなざしを私たちに注ぎ、私たちを愛して下さって（*Mk* 10,21参照）、すぐに私たちに呼びかけ、「わたしについて来なさい」（*Mk* 1, 16参照）と言われた主の無償の愛を体験することから生まれます。この無償の愛を体験した人は、自分も（主が青年を見つめ、愛して、呼び戻されたという）その出来事と同じ経験をしていること、主について情熱を込めて話している（*Jn* 4,39参照）こと、自分も主に召されていることに気がきます。その人は他の人々を温かく真摯に受け入れて、生活やいろいろな計画を分かち合うようになります。神と他者に惜しみなくすべてを捧げる生活が始まります。それも、その相手が何かしてくれるからではなく、神であり人であるからなのです：「ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」（*Mt* 10,8）。召命司牧は自分が召命を生きるその生き方を私たちに問うはずです。召命を「喜びと誠実さ」をもって生きる人だけが、他者に影響を与えることができ、影響を受けた人たちもまたキリストに出会い、キリストに従うようになるのです（*OrPCV* 14 参照）。

粘り強さと忍耐。私たちのもとにやって来る志望者の現状を考えると（*Or* 6

参照)、焦りは禁物です。召命司牧においては農夫の粘り強さと職人の忍耐が必要です。召命とは一粒の種のようなものです。それは、芽を出し、成長し、熟しますが、枯れてしまうこともあるのです。召命の識別には、長期にわたる、個人的な同伴が必要です。つまり、召し出しを受けた人と召命司牧の働き手の双方に「忍耐強い努力」が求められます(VC64 参照)。今日では、召命のプロセスにおけるタイムスケールは長くなっています。なぜなら、志望者の多くは奉献生活を望みながらも、一生涯を捧げることに恐れを感じており、脆さや不安定さを抱えているからです。人生の重要な決断をするには、それがどのような決断であれ、時間がかかるものです。一生涯の選択をするということは、原則として「永遠に」ということであり、さらに長い時間が必要なのです。

### 召命司牧の分野におけるいくつかの優先事項

召命司牧の分野において管区が引き受けなければならない多くの優先事項の中でも、特に基本的なことをいくつか本書で取り上げたいと思います。

共同体及び管区レベルで、召命司牧のアニメーターとなる責任を引き受けること。「新しい召命を促し、支えることは、すべての共同体と兄弟一人ひとりの責務である」(GGCC 145,2)。私たちは自分に課せられた義務を人任せにし続けることはできません。私たちには、生活を通して証しすることによって召命(神から召されている)という福音を告げ知らせる義務があるのです。私たちには、フランスコの福音的生活の体験を分かち合いたいとの願いを他者の心に呼び起こすために、フランスコの人柄、言葉、生活を告げ知らせる義務があります。私たちには、新しい召命に注意を払う義務があります。私たちには、召命司牧のアニメーターになる義務があります(OrPCV 9,13 参照)。これらの義務から逃れることはできません。

召命司牧を適切に企画すること。召命を促進する上で、これといって特にすぐれた戦略や手段があるとは思われません。大切なのは、「召命の問題が組織的、機能的、または構造的な計算に直接結びつくものではない」(OrPCV2)ことを認識することです。神はご自分が望まれる人をご自分が望まれる方法で召し出されます。そして、人はその召し出しを自由に受け入れることも拒否することもできます。二通りの自由があるわけです。しかし、本書の特に10番とそれ以降に明記されていることを考慮に入れて召命司牧プロジェクトを立案することは必要です。

明確に決然と青年司牧を選ぶこと。これは、召命司牧の不可欠の基本で

す。大切なことは、若者たちのためにふさわしい社会環境をつくること、若者たちを福音化すること、彼らにイエス・キリストを宣べ伝えること、若者たちが初期の段階からさらに深く献身する段階へと移行できるよう助けるプロセスを選ぶこと、青年司牧活動の働き手を育成することです（*OrPCV*8参照）。

\* \* \*

もしも「召命の問題が、さまざまな会に直接に関係するばかりか、教会全体にもかかわるまことの課題である」（*VC* 64）ならば、私たちにとっても課題であり、問題であるはずです。私たちがいわゆる「召命の冬の時代」に悩んでいるにせよ、あるいは「召命の春」を体験しているにせよ、召命司牧は私たち全員が十分に努力し、全力を傾け、信頼する価値のあるものです。召命司牧が真正なものであるためには、召命を生み出すための効果的で絶えざる、大胆で断固たる努力が必要です。本書の作成に携わった人々、本書を承認した総理事会、本書を発布した総長の願いは、本書が、召命の領域において多大な霊的かつ物質的な力を注いでいるすべての人々（*VC* 64参照）、勇気をもって主に信頼し、「沖に漕ぎ出す」（*Lk* 5,4）気構えのあるすべての人々、そして、「福音のために自らを完全にささげることの美しさ」（*VC* 64）を喜びをもってあかしし、他の人にも「来て、見なさい」（*Jn* 1,39）と大胆に声をかけようとするすべての人々の助けとなることです。

ホセ・ロドリゲス・カルバリョ  
養成学問総事務局長

## 序文

1. 召命のための司牧活動は第二バチカン公会議以降、教会の旅路の中で次第に重要性を増してきました。公会議の公文書や宣言<sup>1</sup>、様々な国際的会議<sup>2</sup>やコンチネンタル・コングレス<sup>3</sup>は召命のための司牧活動の正しい捕らえ方と適切な実践方法について見解を表明しています。中でももっとも重要と思われるのは次の点です。すなわち、救いの歴史（個人的な独自の歴史としての召命）を重視すること、時のしるしを識別する必要、世界に対する神聖なものへの教会の招き、カリスマと使徒職という多様な貢献を通して一つの使命のために結ばれた共同体の重要性<sup>4</sup>です。

本会は、第二バチカン公会議が求めた刷新のプロセスにおいて、召命のための司牧活動に関する教会の歩みに従って来ました。1988年に発布された会憲は、この歩みの成果であり、20年間の総会、特に、1971年のメデリン臨時総会<sup>5</sup>と1981年の養成に関する総評議会<sup>6</sup>の集大成とも言えるものです。

会憲が発布されて後、各種養成担当者の様々な国際召命担当者国際大会が開かれ、フランスカン養成綱領<sup>7</sup>や総長兄弟ヘルマン・シャルックによる「世界をキリストの霊で満たすために (*To Fill the World with the Spirit of Christ*)」<sup>8</sup>が公布され、それらは私たちのカリスマにおける召命のための司牧活動の意味を究めるのに役立っています。

1997年のアジジ総会は、そのような旅路への招きを受けて、総理事会に召命のアニメーターの国際大会を開くように働きかけ、それは2000年にアジジで開

---

<sup>1</sup> John Paul II, *PDV*, 1992, 34-41; *VC*, 1996; *NMI*, 2001; Congregations for Catholic Education, for the Institutes of Consecrated Life and Societies of Apostolic Life, *SPV*, Rome, 1992.

<sup>2</sup> *Pastoral care of vocations in local Churches*. Concluding document of the International Congress of Bishops and those responsible for Church vocations, Elle Di Ci Turin, 1983.

<sup>3</sup> 1st Continental Congress of Latin America in 1994; The Latin American Episcopal Council, *Youth and Educational Pastoral activity in the faith. VI meeting of Youth Pastoral – Caracas – October 1988*. SEJ, Bogota 1989; Latin-American Episcopal Council (CELAM), *The process of education the faith of youth*, Bogota 1993; The Pontifical work for Church vocations, *Vocations pastoral in the local Churches of Europe, Work document of the Congress on vocations to the priesthood and consecrated life in Europe* (Rome, 5-10 May 1997), Edizioni Paoline, Milan 1996; Pontifical works for Church Vocations, NVNE, 1997.

<sup>4</sup> *Work document of the European Congress*, n.4.

<sup>5</sup> Compi, *Formation in the Order of Friars Minor*, in *Documents of the extraordinary General Chapter* (Medellin 1971) Bologna 1972.

<sup>6</sup> Plenary Council of the Order, *Document on Formation*, Rome 1981.

<sup>7</sup> General Curia OFM, *RFF*, Rome 1991

<sup>8</sup> H. Schaluck, *FE*, 1996.

催されました。

長い時間をかけたおかげで、召命のための司牧活動の意味、目的、範囲というものが次第に明らかになり、ついには、この活動がフランシスカン養成のまことの適切な段階として、また、本会のカリスマと使命に忠実な特別の分野として認識されるにいたりました。

本書は、このプロセスの一環として紹介するものであり、本書が、会のすべての構成単位および各地の兄弟共同体にとって、召命司牧をそれぞれの文化的、宗教的、教会的文脈において企画、検討するための手掛かりとなることを願っております。



## 小さき兄弟会における召命司牧の現状

### 現状を振り返って

2. 国際召命担当者国際大会の準備と開催とその結果生まれた総括文書によって、本会内の召命司牧の現状がどうなっているかを知ることができました<sup>9</sup>。この会議のおかげで、召命司牧の現状と様々な実践方法が明らかになったのです。したがって、そこで得た召命司牧の体験と方法を本会の置かれた様々な地理的、文化的状況において一体化することが可能になりました。また、この分野においてこの国際的な兄弟会が向かおうとしている、現在と未来を左右する方向を見極めるのに役立ついくつかの共通要素に焦点を絞ることも可能になりました。

この召命担当者国際大会に対して各管区が声をそろえて反応したところによれば、この分野で皆の意見を聞き、会議を開く必要がある、そして、フランシスカン的な精神で召命司牧について考え、行動するための方向性と共通路線を出す必要があることは明らかです。実際、本会が第二バチカン公会議以後30年間、フランシスカン・カリスマを再発見し、再活性化し、実現するために数々の試みを行なって来たおかげで、この召命担当者国際大会はこうしたすべてのことを表現することができました。<sup>10</sup>

召命の問題はカリスマが活気を持ち、現に実践されているかどうかと表裏一体なのです。<sup>11</sup>今は重大な時です。未来への約束に満ちたたった一度の濃密な時 (*kairos*) ですが、また同時に、その未来の意味を見いだすためにコミットする時でもあります。神の霊は今日も働いておられ、福音宣教のための道筋を開いてくださり、福音を私たちの生き方によって証しするように招いてくださっているので、どのような時間帯も神の時間であると強く確信することができます。<sup>12</sup>これに基づき、大切なことは、個人および共同体レベルの刷新を促進するために、召命司牧を生涯養成の旅路と調和させ、連続性を持たせることです。

---

<sup>9</sup> The International Congress of Animators for the 召命司牧 in the OFM was held in Santa Maria degli Angeli (PG) from the 7 to 30 October 2000, with the participation of 125 vocations Promoters.

<sup>10</sup> Cf. Civisva and Cv, *MR*, 1978, 11: "The very charism of the Founders appears as an *"experience of the Spirit,"* transmitted to their disciples to be lived, safeguarded, deepened and constantly developed by them, in harmony with the Body of Christ continually in the process of growth".

<sup>11</sup> Cf. Paul VI, *ET*, 1971, 55; "Looking at you and at your life, young people can understand well the call that Jesus will never cease to make resound in their midst".

<sup>12</sup> Cf. "The Lord gives me brothers", DF, in *Acta Congressi Internationalis pro Animatoribus OFM Curae Pastoralis Vocationum promovendae*, p...; cf. also *Lumen Gentium*, 46; "Let no one think that religious have become strangers to their fellowmen or useless citizens of this earthly city by their consecration."

現代のフランシスカン・カリスマの体現に関する章は、そのカリスマが極めて多様な文化的、社会的、宗教的環境において「顕現される」ような預言的かつ全く新しい方法を見いだすという基本的な問題を扱っています。そうした環境においてカリスマは、外部の影響を受けずに「ほとんど新たに生まれる」ことになり、こうして多様の中の統一が保証されるのです。<sup>13</sup> 紹介、提案、同伴の段階を経て、多様な文化に対する深い尊敬の念を育むことは召命司牧の第一の務めであることを私たちは承知しております。このように、召命の賜物に怠りなく注意を払うことから、聖フランシスコに与えられ、ダイナミックで独創的な忠実さに守られた福音的生活様式の新しい表現が生まれ得ることを認識することができます。

したがって、召命の問題は、組織的、機能的、または構造的な計算に直接結びつくものではなく、キリスト教共同体との関係と召命の重要性に由来するまじめな神学的 - そして特に人間学的、教会論的 - 考察の結果とされています。

3. 召命司牧を奨励し、特に、様々な文化におけるフランシスカン・カリスマの成長と鮮明さを促進するためには、次の3点が重要です：

世界の歴史と教会にしっかりと注意を払い、自分の小さな世界に閉じこもらないこと；

人類学と教会学の深い研究の重要性。これらの学問は、人間観、召命の神学、召命のための司牧活動の神学、および教育・司牧的な応用などの間のよりよい関係を強調するために、召命のための司牧活動を開始し、鼓舞し、動機付けるものであるべきです；<sup>14</sup>

フランシスカンの召命の旅路の重要な時期について深く研究する必要。研究にあたっては、本会およびフランシスカンファミリーの生きた霊的かつカリスマ的な伝統に即して、聖フランシスコのインスピレーションを得ることが大切です。

これまでの長い旅と最近の召命担当者国際大会から得ることのできたパノラマは光と影に包まれているように見えますが、未来への希望と楽観主義に満ちています。

---

<sup>13</sup> Cf. G. Bini, *The Order Today*, Rome 2000, III, 1.

<sup>14</sup> Cf. *New vocations for a new Europe*, n. 25.

## 召命の状況に対する反応

4．修練者と誓願宣立者の数を見ると、本会の全般的な召命の状況は悪くありません。少なくとも全般的なレベルでは、召命司牧の主な問題は召命の数ではないと言えます。<sup>15</sup>

召命の数値的な状況は国や地域によって非常に異なります。

大抵の地域で兄弟の人数の減少を決定付けているのは、召命の堅忍状況 (vocational perseverance) です。兄弟たちの人数の増加は、必ずしも私たちの召命にふさわしい兄弟生活のニーズと福音宣教の使命に合致しているわけではありません。修練者と初誓願宣立者の数は「姉妹なる死に迎えられる」兄弟の数より多いのです。ブラザーの兄弟の減少は、その召命の大切さを実感する人が増えていることを考えると注目に値します。

教会、修道生活全般、および本会における召命の数に関する統計資料は「準備文書」( *Instrumentum Laboris* ) と召命担当者国際大会記録<sup>16</sup>に記載しています。

言うまでもなく、結果は必ずしも努力に正比例するわけではありません。いくつかの管区が召命司牧について試行錯誤の段階にありながら、励みになる結果を得ているのに対し、他の管区は、青年司牧と召命司牧のために多くの工夫と努力を費やしたにもかかわらず、期待した結果が得られていません。

5．会の多くの管区では、召命の数が減少していますが、それに対する反応は様々です。

ポジティブな反応として注目したいのは、多くの管区で、召命が減っているからこそ、召命司牧に対する兄弟たちの関心が増えているという点です。この態度は、青年司牧と召命司牧の企画立案に兄弟たちを携わせようとの試みにおいて顕著に見られます。たとえば、召命のための個人および共同体の祈り；召命の識別における青年たちの霊的指導と個人的な同伴に更なる注意が払われているこ

---

<sup>15</sup> Cf. G. Bini, *The Order Today*, page 15: "As I look at the Order I think the real problem here is not the lack of vocations but rather our inability to recover an ordered and harmonious set of values which we will live with joy and conviction, in such a way that the perennial fruitfulness of our charism will again be vindicated. What is really at stake is not so much whether the structures of the Order will continue or whether we will end up with more or less friars, but whether there will still be a quality of Franciscan life, lived to the full, today and right up to the last day of our life".

<sup>16</sup> Cf. *Instrumentum Laboris* I.2, in *Acta Congressi Internationalis pro Animatoribus OFM Curae Pastoralis Vocationum promovendae*, p. 247-252.

と；兄弟たちが前よりも勇気をもって召命についての紹介・指導を行なっていること（in making the vocational proposal）；青年たちを受け入れる施設“houses of reception”が増え、黙想会や親睦会、錬成会などの様々な活動を提供していることなどです。多くの兄弟は、私たちが体験している危機が決して私たちを失望させたり、自己憐憫や安易な諦めに陥らせたりするものではなく、むしろ、過去から学び得た教訓に照らして、時のしるしを注意深く読み取り、召命の問題に絶えず積極的に司牧的な注意を払うよう促すものであることを確信しています。

また、これとは逆の傾向を示す反応も見られます。中でも、注目すべきは次の点です。いくつかの管区は、自分たちの生き方に魅力がないから召命がないのだと思い込んで、罪責の念に起因する自己憐憫に陥っていますし、また他の管区は、自分たちもそろそろ終わりだなと考えて、苦しい結末に向かって準備しています。その他、いつか良い時が来るのを待っている管区もあります。

上に述べた反応の例は当然のことながら、一般論であり、過度に単純化されたものですが、それはそれとして、本会の置かれた地理的・文化的状況に見られる様々な反応を注意深く吟味するようにとの招きであり、刷新された召命司牧を企画するにあたり考慮する必要があります。

### 志望者の現在の状況

6．本会の召命の傾向とそれに対する反応を知れば、一步前進することができますし、志望者のプロフィールについて調べることができます。つまり、私たちのもとにやってくる青年たちのプロフィールのことで、私たちは召命司牧の様々な段階において彼らに働きかけ、召命のための同伴を行ないます。

召命担当者国際大会<sup>17</sup>を開くまでの道のりを心に留めると、本会の志望者のプロフィールは次のようなものになると思われまます。

- a. 人間的成熟度のレベルでは、私たちのもとにやってくる青年に関し広範な類型があります。たとえば、自由と本物に憧れる健全な願望を示し、自分自身の生活設計能力があって未来を豊かに「夢見る」ことのできる、希望の動機がはっきりした青年たちがいます。正義・平和・エコロジー、非暴力、奉仕などの現代の諸問題に敏感な青年たちもいます。また、主観性と注意散漫の文化にどっぷり漬かって生きている青年たちもいます。このような文脈において考えると、青年たちは自己中心で他者を受け入れることができない、ふ

---

<sup>17</sup> Cf. *Instrumentum Laboris* “In verbo tuo” 1,2,3, in *Acta Congressi Internationalis pro Animatoribus OFM Curae Pastoralis Vocationum promovendae*, p. ...

らふらした感情的な生活を送っているように見えます。その結果、アイデンティティーが定まらず、未熟なのですが、未完成なプロジェクトのようなもので、いつも無限の可能性を秘めています。現代の若者は消費主義的でコミットするのを嫌がり、理想に乏しい傾向があるようです。彼らの特徴は、心理的、情緒的、性的に脆く、しばしば複雑で疲れ切っており、思考力が貧困なことです。<sup>18</sup>

- b. キリスト教的養成に関して言えば、教会の信仰について十分な基礎知識を持っている人はたくさんおり、彼らは、福音書の教えを受け入れ、御言葉を通して神を真剣に求め、祈りと福音的徹底主義（gospel radicalism）への情熱に満ちています。これらの人たちは通常、熱心な教会グループの出身です。しかしながら、こんにちの状況にそぐわないキリスト教的教育を受けた人々は、それよりはるかに多いのです。大抵の場合、彼らの宗教教育は霊性や奉献の形式とか伝統主義者の教会観に根ざしています。彼らはセクトや原理主義者の表現の犠牲になっていることもあります。宗教教育は召命の動機に影響を与えます。ですから、召命の動機は、個人の人格に敬意を払い、神の召し出しの神秘に注意を払いながら、注意深く吟味される必要があります。一般的に、貧しい宗教教育と薄弱な召命の動機とは相関関係があります。たとえば、心理上の問題に過ぎないとはいえ、兄弟会の中にも、いわゆる「立身出世」を求めたり、あるいは安全圏に避難したりといった例もないわけではありません。また、道徳的に困難な状況を体験してきた志望者もいます。これらの若者たちのほかに、聖フランシスコの模範に倣い、無条件でキリストに奉献したいとの理想に燃えて私たちのもとにやってくる人々がいることを忘れてはなりません。彼らは福音的徹底主義（gospel radicalism）に心を動かされてある生き方を選び取り、私たちのもとにやってくるのです。
- c. 文化と知的準備教育については、状況は多種多様です。大学教育を受けた者もいれば、初等教育を受けただけで私たちのドアを叩く者もいます。後者の場合、哲学や神学その他の研究課程について行けないケースが往々にしてみられ、劣等感も持たずに抵抗なく兄弟会にとけ込むことが困難になることがあります。
- d. 召命とフランシスカンの次元については、志望者は聖フランシスコのメッセージと人柄に非常に惹かれてやってきます。やがて彼らは、フランシスカン・カリスマの観想的側面を模範的な形で反映する聖クララの人柄についても知るようになります。神の偉大な友人であるこの二人に魅せられた若者たちは、自分の召命を識別するに当たり、この二人からインスピレーションを

---

<sup>18</sup> Cf. Cicvsva, *Potissimum Institutioni*, 1990, 86-89.

受けようとする傾向があります。通常最初の衝動は大変強く、それがアッシジの貧者やその「小さな植木」に対する思い入れや賛美の感情のレベルに留まることはあり得ません。聖フランシスコと聖クララの生き方について本格的に知りたいという欲求と同時に、召命の識別という重大なプロセスにおいて自己のこれまでの生き方を深く見つめたいという欲求が生まれます。フランシスカンの次元の中で、若い人々は特に兄弟愛と必需品だけに囲まれた生活に魅力を感じています。これらの価値は、競争の激しい、所有欲と消費主義の社会である現代文化に代わり得るものとしての関わりの文化に足を踏み入れる方法と考えられています。

- e. *出身地については*、一部の管区に存在するフランシスコ会系の学校や小神学校出身の志望者はもはやごくわずかです。志望者は青年会（たとえばヤング・フランシスカンとか召命司牧）や祈りのグループ、ボランティア体験などを通じてやってきます。大卒者もいますが、本会の運営する大学を出た者はまれです。大半の志望者は召命のための同伴を受けずに私たちのもとにやってきます。したがって、多くの場合、本会を志望する若者は「私たちのグループ」や私たちの小教区の出身ではないという事実に着目する必要があります。<sup>19</sup> いくつかの管区では、他の会や司教区の神学校、会の他の管区から一定の人数の志望者を受け入れています。こうした現象には細心の注意と思慮深さが求められます。
  
- f. *年齢についてですが*、志願院を訪れる志望者の大半は18歳から20歳です。しかし、特に西欧に見られる傾向ですが、30歳とか40歳、時にはそれ以上の年齢層の志望者が最近増えています。年齢の問題はそれぞれの管区で個別に考慮されています。識別の原則的な基準は、志望者が養成の旅路に積極的に入ってゆく柔軟性を持っているかどうかです。

---

<sup>19</sup> Cf. *The development of vocational pastoral activity in particular Churches*, 62.

## 小さき兄弟会における召命司牧の諸原則

### OFMにおける召命の司牧的配慮の意味

7. 準備文書“*In verbo tuo*”は、召命司牧の分野でいかに普遍的な教会 (universal Church) が成熟してきたかを心に留めながら、私たちの召命と宣教する使命という最も広範囲な文脈における召命司牧の意味を明らかにし直すのを助けてくれます。したがって、ここで、召命司牧と福音宣教および養成との関係について、考察を試みたいと思います。まず始めに、そのような提案について私たちの諸文書が述べていることについて検討してみましょう。

これらの文書は、召命のための司牧活動を「召命の司牧的配慮 (pastoral care of vocation)」と解釈しています。この言葉の語源的分析の結果、深い意味、つまり、召命のための司牧活動の「何たるか」が明らかになったのです。それは、まず、「配慮 (ケア)」であり、ラテン語のクラレ (curare) から派生した名詞クラ (cura) であって、物または人を心に抱く、世話をする、心にかける、という意味です。これらの意味は「クラレ」(世話をする) するように招かれた人の全面的な関わりを明らかにしています。召命司牧は、養成と同様に「優先使徒職」であり、召命の司牧担当者は、召命の賜物という計り知れない神秘を携えてやってくる質問者に対して慎重で、愛情と尊敬に満ちた注意を払わなければなりません。この神秘の次元は、如何なる召命の賜物も本質的に無償のものであることを私たちに思い起こさせ、召命のアニメーター/養成者に対し、神秘に対する鋭敏な感覚と、まず自分自身の、次に他者の謙遜で明晰な識別力に対する尊敬の念を持つことを求めています。<sup>20</sup>

しかも、召命司牧は「司牧的 (pastoral)」ケア (配慮) です。「司牧的」という形容詞は、羊飼 (Shepherd) (牧者 pastor) の姿と任務を連想させます。この場合羊飼とは、完全に聖書的な意味を持つものです。したがって、「司牧的」という語は、「クラ (cura)」が行なわれる様式、すなわち、父なる神とイエスがご自分と人々との関係を表すために造り出された「聖書的な羊飼」のイメージを強調する語です。そこから、「司牧的ケア」に当たる人はイスラエルの神なる牧者の心の動きを自分のものとしなければならないという結論が導き出されます。つまり、親しさ、継続的な同伴、理解、そして自由な教育が求められるということです。

「司牧的ケア」は、「召命」をその直接の目的とし、ここでいう召命とは、神

---

<sup>20</sup> Cf. *New vocations for a new Europe*, n. 35.

の民に見られる幅広い意味での召命から、狭義のフランシスカンとしての召命までを含みます。召命司牧は、同時に二通りのプロジェクトとして考えられなければなりません。すなわち、一つは、神の召し出しによる使命を識別できるようにすべての若い人々を対象とした大まかなプロジェクトであり、もう一つは、フランシスカンのカリスマを生きる様々な生活様式（第一会、第二会、在世フランシスコ会）にはっきりと興味を示している若い人々を対象とした特別のプロジェクトです。<sup>21</sup>

### 福音宣教における召命司牧と青年司牧の奉仕職

8. 召命の数が減っているとの所見から、しばしば一種の司牧活動（pastoral activism）が生まれます。それはたとえば、独自のイニシアチブや魅力的な仮説から生まれ、最もうまくいった場合、召命の旅路にまで到達するものであったり、あるいはまた、さまざまな会合や会議を開いて対策を考えたり、討議、検討したりすることでもあります。時には、その結果、青年司牧活動のように、一部の司牧活動が他の司牧活動よりも強調されることもあります。

今日においては召命司牧を特定の司牧的な領域に限定する必要があるのでしょうか。教会の宣教者的な性質の中で最近見直された福音宣教というより広い分野に組み込まれた召命司牧の意味と重要性について考えなくてよいのでしょうか。この点についてもう一度検討してみましょう。

教会は宣教の原点は三位一体の中にあると考えています。つまり、宣教は教会の存在そのものに属しており、一つの機能に限定されないということです。教会においては、神の民、すなわち気高く預言的な聖職者として奉獻することを選択することと、福音を告げ知らせる使命とは不可分のものです。教会、交わりの神秘は、それ自体を宣教の最初の対象としています。教会は福音化され、然る後に宣教のために派遣されるのです。<sup>22</sup> したがって、教会の中に、また、教会内の奉獻生活およびフランシスコ会の中には、宣教する使命のない召命はありません。

<sup>23</sup>

この精神で、私たちは福音宣教とは本会のアイデンティティーを確立することにほかならないことを認識しています。私たちは福音化されたからこそ存在する

---

<sup>21</sup> Cf. *Instrumentum Laboris* "In verbo tuo", III, 1.

<sup>22</sup> Cf. *Lumen Gentium*, 44; *Evangelii Nuntiandi*, 9; *Redemptoris Missio*, 1-3; *Christifideles laici*, 8; *Vita Consecrata*, 17-22.

<sup>23</sup> Cf. IX Sinodo dei Vescovi, *Instrumentum laboris*, 62.



のであり<sup>24</sup>、それゆえに、兄弟会において福音宣教者なのです。さもなければ、私たちの召命は無意味なものとなってしまいます。<sup>25</sup> まさに私たちの生き方の中にこそ、効果的な福音宣教の特権的な理由があります。私たちは、聖別された人間である限り、教会の中心をなす聖性を証しするように招かれており、パウロ6世はいみじくも次のように述べています：「(修道者は)真福八端の過激な要求に対して徹底的に従おうとする教会の願いを具現するものです。」<sup>26</sup>

この意味で、召命司牧のための召命司牧ということがあってはなりません。召命司牧には当地の教会の中での福音宣教と司牧活動との緊密な連携が必要です。したがって、召命司牧のために働くということは、私たちの召命と宣教使命に添って働くことを要求するものです。交わりの視点からも、当地の教会につながって、またフランシスカン家族および信徒とも協力して働くことによってこそ、召命司牧が真の意味で「教会全体による共同の取り組み」<sup>27</sup>となるのです。使徒的書簡「新千年期の初めに」(*Novo Millennio Ineunte*)はこの方向性を再評価して、現代の召命の促進が多様性ある教会との交わりの中で行なわれるように、さらに、信徒とより大胆で効果的に協力するように求めています<sup>28</sup>。これまでとは異なる新しいカリスマや使徒職を受け入れることが必要です。信徒の働きを評価し、彼らに活動の機会を与えることはまだ発見し切れていない時のしるしです。しかし、結婚生活が召し出しと理解されるようになるにつれて、信徒の働きもますます重く見られるようになるでしょう。<sup>29</sup> この点に関して、教会の歴史がまだ浅い国々の管区は預言的な力となっております。

召命司牧は、青年司牧と排他的ではないが特別な関係にあります。<sup>30</sup> 青年司牧は若者たち(フランシスカンに「親しい」者たちばかりでなく「よその」者も含めて)と同伴して、彼らがキリスト者共同体の中ではっきり示された信仰の道を歩んで、人間として、またキリスト者としてのアイデンティティーを発見することができるよう指導するものです。この意味で青年司牧は当然のことながら召命的であると言えます。なぜなら、如何なる信仰の旅路もその性質上、人をして己の個人的召し出しに耳を傾けるよう導くものだからです。青年司牧は、信仰に導き、キリストに従うように導くならば、その召命的役割を果たしています。キリスト者の召命はこの具体的な信仰に根ざしており、このことは、人生設計を選び、教会において人々、特に貧しい人々への奉仕に献身することを選ぶに当たっ

---

<sup>24</sup> Cf. *GGCC* 86; *Report to the General Chapter of Assisi 1997*, 4.10.1996, 119-122; *PrS*, c.4.

<sup>25</sup> Cf. *Vita Consecrata*, 64.

<sup>26</sup> Cf. *Evangelii Nuntiandi*, 69.

<sup>27</sup> Cf. *Vita Consecrata*, 64.

<sup>28</sup> Cf. *Novo Millennio Ineunte*, 42-46; cf. also *Christifideles laici*, 15.55.65.

<sup>29</sup> Cf. *Familiaris Consortio*, 1981, especially no. 50 ; 63 ; 66.

<sup>30</sup> Cf. *The development of vocational pastoral activity in the local Churches*, 67-70.

て識別が必要であることを示しています。

召命司牧にとっても青年司牧にとっても、いくつかの基本的な方向付けが必要です。神学的・司牧的見地から見れば、召命司牧も青年司牧もその根源は同じで、すべての信徒を洗礼によって結びつける一つの召命と使命に根ざしています。青年司牧は召命司牧と同じではありませんが、結びついています。

これらのことを前提にすると、方法論と司牧活動の見地から見れば、召命の募集活動のやり方を見直さなければならないことは明らかです。そうすることによって、人間として、またキリスト者としての成熟の歩みを大切にす教会の召命を明確に断固たる姿勢で促進することができるでしょう。

### 初期および生涯養成における召命司牧

9．召命司牧は共同体の神秘である教会の深奥にあり、したがって、私たちの召命と宣教使命に密接に関わっています。だからこそ、召命司牧はまさに福音宣教と養成との重大な狭間にあるのです。

召命司牧は召命という福音の告知から始まり、召命の提示のうちに成熟し、洗礼を受けたすべての人が持っている召命の賜物の同伴と識別に至ります。これは召命司牧に与えられた養成的な任務であり、フランスカンの精神に則った神学的に正しく完璧な人間学によらなければ遂行できないものです。召命司牧が追究しようとしている「ヒューマン・プロジェクト」の問題は、如何なる養成活動にも先行するものです。二つの側面から生まれる緊張を召命司牧の質を高めるチャンスとする必要があります。

召命司牧を養成のプロセスに組み入れるためには、教育的な特徴をつかみ、次のことを明らかにしなければなりません：

- a. 呼んでくださっている他者 (*other*) との出会いとその呼びかけへの応答において、自己実現するために、若者を同伴する方法。
- b. この召命の旅路が賜物として、つまり、自己を他者に捧げるとい犠牲的な愛で実践されるためには、どのように基礎を築けばよいか。

生涯養成が養成のプロセスの重要な環境となることを私たち小さき兄弟がはっきり自覚した時に初めて、若者たちのための信頼できる教育・養成計画を立案することができます。<sup>31</sup> 自分が受けた召命の賜物をはっきり自覚した兄弟共同

---

<sup>31</sup> Cf. Secretariat General for Formation and Studies, *Ongoing Formation in the Order of Friars Minor*,

体は、召命の発信地となり得、聖フランシスコの福音的な直感を維持するだけでなく、促進し、さらに、未来に向かってフランシスカン・カリスマの新しい展望を開くことができます。<sup>32</sup>

内容がこのように明らかになるに従い、本会の中の意識も次第に高められていきます。召命の提示と同伴を第一段階とする初期養成が一貫した方法で行なわれるためには、生涯養成に力を入れる必要があります。<sup>33</sup>

次のような事実が次第に明らかになってきました。つまり、召命司牧は、人間としてまたキリスト者としての成長と具体的な召命の選択という観点から、特別な同伴と識別を提供する限りにおいて、生涯養成とのつながりを持つ初期養成のプロセスの不可欠な部分を形成しているということです。このように考えると、将来の召命を堅固なものにするためにも、召命司牧は極めて重要であることがわかります。

このようにいろいろなことが明らかになったおかげで、アニメーターの役割はより養成者の役割や司牧者の役割に近いものとして捉えられるように思います。これらの役割をダイナミックに統合することが奨励されますが、それは各管区や協議会内の具体的な旅路において初めて可能になるのです。

そういう理由で、養成者として、また司牧者としての資質を備えたアニメーターの養成は前にも増して急務となっています。それは、召命司牧がそれを担当する少数の者だけでなく、すべての兄弟や兄弟会全体の共同行動となるためです。

フランシスカン的な「生き方」をすることによってキリストに倣うことができるという希望を示してくれる若者たちを対象とした特別プロジェクトに取り組むに当たり、召命司牧は次の点を考慮しなければなりません：

- a. 聖フランシスコのカリスマを他者に生き方の模範として示すために、フランシスカン生活を証しすること。
- b. 聖フランシスコの福音的生活の体験を共に分かち合うよう他者を招くために、聖フランシスコの人柄、生活、言葉を紹介すること。
- c. 聖霊によって導かれたフランシスカン生活への新たな召命を識別し、歓迎し、

---

Rome 1995.

<sup>32</sup> Cf. *RFF* 104 and 106.

<sup>33</sup> Cf. G. Bini, *The Order Today*, II, 1; General Secretariat for Formation and Studies, *The Spirit of Prayer and Devotion*, Rome 1996, Topic 14, 1-2.

育むための活動を行なうこと。<sup>34</sup>

方法：召命司牧のためのオリエンテーションから企画立案まで

### 方法

10. 小さき兄弟会における召命司牧のためのこの「オリエンテーション」は、本会が世界的であるがゆえに、また、社会文化的な多様性を持ち各地の文化に根ざして行く必要があるがゆえに、必然的に不完全なものにならざるを得ません。

召命司牧のための管区プロジェクトを立案するに当たり、召命のために働くチーム、管区の養成・学問担当者、福音宣教事務局、そして管区理事会を参加させることが重要となります。彼らとの連携により、調整や統合が可能となり、つぎのような秩序だった段階を踏むことができます。

- a. その中で召命司牧が動くことのできるような人間学的、神学的、フランシスカンの領域を明らかにすること。この段階で、何らかの刺激を与え、それが、本会が生活し成長して行くさまざまな文化的背景の中で受け入れられ、翻案され、開花することが望ましいのです。
- b. 「優先課題1997年(PrS)」や「PCV総括文書2000年(LGB/FD)」にすでに述べられていることを調べながら、それらの文書の中で問題となっていることを自分に問い掛けてみる。
- c. 召命の疑問を携えて私たちのもとにやって来る人々や、私たちの関心の対象者である若者の世界の現状分析、そして、志望者が訪れる環境としての地方および管区の兄弟共同体の現状分析を再度行なうこと。
- d. 養成、福音宣教、兄弟共同体の分野において地方および管区レベルで、召命司牧の目標、役割、対象を明らかにすること。その方法は、私たちの目指す目標や、私たちがフランシスカン・カリスマに則って用いようとしている手段、直接の責任を有する担当者(召命司牧のアニメーター)、協力者(他の兄弟、私たちと協力関係にある修道会、信徒、専門家など)、召命の告知・提示・同伴というさまざまなプロセスにおいて私たちが頼りにする人々のことがはっきり分かるような方法でなければなりません。

---

<sup>34</sup> Cf. GGCC 145.

- e. 召命司牧のための管区プロジェクトを拡張すること。
- f. そのプロジェクトを評価する時間と方法を指し示すこと。

### 人間学的、神学的領域

11. 召命司牧の基礎となり、召命司牧を鼓舞し、動機付ける基本的な人間学的、神学・司牧的な要素について考えてみましょう。その目的は、補助性の原則 (principle of subsidiarity) を心に留め、フランシスカン・スタイルを強調しながら、人間の考え方、すなわち、召命の神学、召命の司牧的活動の神学と教育・司牧的な実践方法との関係を明らかにすることです<sup>35</sup>。

まず、人間学についての短い説明から始めましょう。人間学とは人間が実存的な関係に招かれているという意味で、人間を人格を備えた個として捉えるように導くものです。したがって、人格を備えた個人は一つのアイデンティティーとして形成され、その中でコミュニケーションとして自己との関係を持ち、パーティシペーション (参加) として他者との関係を持ち、無条件で存在の完全さを受け入れるのです。

ユダヤ・キリスト教的考え方によれば、人間は神の「像であり、似姿である」と捉えられています (Gen 1,26参照)。神との根本的な関係によって造られたあなたは、「神のあなた」なのです<sup>36</sup>。イエス・キリストの中に神の顔と人間の顔が映し出されています。自分自身について、また自分の運命について問われている人間は、道であり運命であられる神の中に光を見出します。<sup>37</sup> 聖霊のうちに、キリスト者の新しい旋、すなわちイエス・キリストの旅路は、キリストに従うようにと招かれた弟子たちの旅路となります。信徒はその召命への応答の中で、イエスの生涯の繰り返しではない旅路を歩むように招かれており、イエスの生涯の恵みの上に生きるのです。こうして、ユニークで繰り返しではないイエス体験が再現されます。イエスの自伝である真福八端は、すべての信徒にとって可能な行動方針となり、信徒はイエスの中で旅をし、真福八端によってイエスの歩まれた人生の中に組み入れられ、「新しい福音」となるのです。イエスの生涯がご自身の過ぎ越しの賜物の中に成就されたのですから、人間は犠牲的愛の中に自己を実現することができます。<sup>38</sup>

---

<sup>35</sup> Cf. *New vocations for a new Europe*, n. 25.

<sup>36</sup> Cf. *Gaudium et Spes*, 12.

<sup>37</sup> Cf. *Gaudium et Spes*, 22.: 「実際、受肉したみことばの秘義においてでなければ、人間の秘義はほんとうにあきらかにはならない。・・・最後のアダムであるキリストは、父とその愛の秘義の啓示によって、人間を人間自身に完全に示し、人間の高貴な召命を明らかにする。」

<sup>38</sup> *Redemptionis Donum*, 5: "This meaning emerges against the background of the Gospel paradox of

この聖書的な考え方は、今日の人間が自分のことを自分の観点からしか見ない、理解しないという事実と衝突します。今日ではすべては、精神状態、すなわち、時として劇的な様相を呈する個人の実存的な問題に左右されます。人間は、偏った、しばしば断片的な自分のイメージを反映させますが、それは自分を統合する中心を見つけることができないからです。グローバル化のおかげで（基本的には経済面ですが、文化面でもグローバル化が進んでいます）、この問題は全地球規模で広がっており、道を探し求める若者たちに向き合うべきだという声が出てきています。

わたしたちの召命司牧も、そのような人間学的な前提についてたゆまず考察し、深く掘り下げようように求められています。

12. どのような召命も教会の中に召命の神秘と「交流の家と学校」<sup>39</sup>、すなわち、召命を生み、守り育てる懐のような場とを見いだすものです。「教会はその性質上『召命』であると同時に、召命の生みの親であり、教育者でもあります。・・・私たちは今、キリスト者の召命の重要な側面が何であるかを理解することができます。・・・それは、教会を建て、神の国を世界に広げるといった目的を持った賜物なのです。」<sup>40</sup> ですから、私たちは教会をあらゆる召命の相互依存と交流の場と考えなければなりません。<sup>41</sup> 実際、教会の一つの召命の中で、すべての召命が互いに衝突することなく、ダイナミックな相互関係を保ちながら開花するのです。召命が生まれ、教会を目指すということは、召命の司牧的配慮を深く特徴づけるものです。具体的に言えば、キリスト教共同体は、すべての召命が生まれ、成長し、成熟する場なのです。今日では、多くの召命がキリスト教共同体の端で生まれていることを私たちは知っています。これは司牧活動にとって重要な課題であり、洗礼を受けたすべての人の一つの召命と宣教使命について、また、召命司牧においても信徒との積極的な協力の重要性について徹底的に考える必要があります。

これらの大きな目標を達成するためには、召命司牧はカリスマの交流と分かち合いという脈絡の中で絶えず見直される必要があります。そうすることによって、教会はやがて旅する神の民となり、愛するように招かれるのです。

---

losing one's life in order to save it, and on the other hand saving one's life by losing it "for Christ's sake and for the sake of the Gospel," as we read in Mark" (Mk 8,35).

<sup>39</sup> *Novo Millennio Ineunte*, 43.

<sup>40</sup> *Pastores dabo vobis*, 35; cf. *Apostolicam Actuositatem*, 3.

<sup>41</sup> Cf. *Christifideles Laici*, 19. 45; IX Synod of Bishops, *Instrumentum Laboris*, 66.

このように調整を図ることにより、召命司牧の重要なプロジェクトを開始する司牧的神学について再度検討することが可能です。<sup>42</sup>

このような見地に立てば、召命司牧における召命のための祈りの重要性を理解することができます。「収穫の主」(Mt 9, 38)に願いなさいとのイエスの勧めを心に留め、霊性神学は召命のために祈る理由と方法をよりよく理解するのを助けるものでなくてはなりません。<sup>43</sup> 事実、召命のための祈りは、数多くの方法の一つに過ぎないものではありません。むしろ中心をなすものです。「収穫」は多いが「働く者」は少ないという聖書の教えを思い起こしましょう。

### フランシスカンの召命の旅路：いくつかの重要な特徴

13. ここで、フランシスカンの召命の旅路についていくつかの特徴を挙げてみたいと思います。そのためには、私たちの師父であり兄弟である聖フランシスコの体験を思い起こし、彼が書き物の中でどれほど多くの生活、祈り、霊的考察の糧を与えてくれているかを思い起こすことが大切です。

道を求める若者の目線で、また、彼を受け入れ、彼に同伴する兄弟共同体の観点から、二つの祈りが召命の旅路を説明する助けとなっています。その二つの祈りとは、「十字架上の主の御前で捧げられた祈り」と「全能の神への祈り」(全兄弟会に宛てた手紙50-52)です。

「十字架上の主の御前で捧げられた祈り」の中で、若者は十字架に付けられ復活された主の御前に跪き、生活を照らす光と正しい生活に導く鋭敏な識別力を求めて祈ります。この祈りは、自分の召命を知りたいと願った聖フランシスコの心からの祈りであり、スポレトで見た夢の中での問いかけ「主よ、私に何を望みますか」を補足するものです。

祈りの後半は、神学的徳の賜物に関するものです。聖フランシスコは、神の惜しめない恵みを注がれて初めて識別が可能になることに気づいています。

「全能の神への祈り」の中で、全兄弟会は会のために、また、召命の識別の旅を始めようとするすべての人のために、三位一体の神との完全な一致に導かれるような旅ができるように願っています。「全能、永遠、正義、慈しみの神」の前

---

<sup>42</sup> For the rest you are referred to the LGB/FD of the Congress, which offers starting points for an anthropological and theological reflection, which is always necessary to found an intelligent service to 召命司牧.

<sup>43</sup> Cf. *New Vocations for a new Europe*, n. 27.

で、私たちは人間の貧しさ、弱さを認識し、神のお望みだとわかっていることを果たし、神の御心にかなうことをいつも望ませてくださいと祈るのです。

この旅路において、すべての賜物の中で最も願わしい賜物である聖霊は、私たちが主イエス・キリストの御跡に従い、御父に向かうことができるよう、私たちを清め、照らし、愛で満たしてくださいます。それは、私たちが三位一体との一致を楽しみ、小さき兄弟会として、三位一体への賛美となるためです。

この二つの祈りの中で、自分の人生の意味を理解したいと願う若者の望みと、自分の召命を生き抜こうとする兄弟たちの願いが結合します。こうして、兄弟会の旅路は新しい兄弟たちという恵みに向かって開かれ、各兄弟の旅路は兄弟会という恵みに向かって開かれます。そして、二つの旅路は聖霊に支えられながら一つのユニークな旅路となって、主イエス・キリストの御跡に従いつつ父なる神へと向かうのです。「神の示しを受けて」私たちのもとにやって来る若者と彼を受け入れ同伴する兄弟会の旅路をこそ、私たちは兄弟会の中で、主がお与えくださっているこの召命の恵みの時に発見し、旅するようにと招かれているのです。

この「神の示し」は若者と兄弟会の双方を、それぞれの召命の主演でありアニメーターである聖霊の御前において、何ものをも受け入れる開かれた態度に導きます。このようにして私たちは、召命の司牧的配慮がキリストに従うという忠実さへの共通の誓約であり、それは聖霊の働きによって可能となることを自覚するのです。

集中的で継続的な祈り、深い兄弟愛に満ちた生活、最も貧しい人々と分かち合う真の小ささ、明確で勇気ある福音宣教、まじめで適切な養成、これらは私たちのカリスマの美しさを提示するだけでなく、体験させてくれる召命の新しくて有効な司牧的配慮が育つ前提であり腐葉土なのです。

14. 聖フランシスコのカリスマの中で育った「最初の小さな植木」聖クララも、召命を正しく理解する基本的な態度を示してくれています。彼女は晩年、その遺言の中で次のように述べています：「私たちの寛大な与え主、憐れみの御父から、私たちが受け、また日毎に受けているさまざまな恵みのたまものの中であって、私たちは栄えあるその御父に、大いなる感謝を捧げなければなりません。私たちの召命は優れているからです。これが完全で高尚であればあるほど、私たちの負う義務もいっそう大きいのです。それで使徒も、『あなたたちの召し出しのことを考えなさい』と述べています。神の御子は私たちの道となられ、この道を、ご自分のまことの愛弟子であり模倣者である、われらの祝された父フランシスコの



言葉と手本とによって、私たちに教え示されました。」<sup>44</sup> この背景となっている態度、それは、神の慈しみの具現にほかならない召命の賜物を父なる神に感謝するという態度です。聖クララにとって、フランシスカンの召命とは、ちょうど聖フランシスコが模範を示してくれたように、私たちの道となられたキリストを受け入れ、その御跡に心を込めて従うことにほかなりません。要するに、召命を堅持するためには、自分の召命を「知ること」、つまり、究明し、愛することが必要不可欠です。

以上のことは、召命司牧の「レシピ」を与えてくれるものではありませんが、フランシスカンの召命を喜びと真正さをもって生きることができるための必須条件を兄弟会に示しており、キリストに出会い、キリストに従うための刺激となっています。

---

<sup>44</sup> Cf. *Test C* 1-5.

## 降ろすべき三つの網

15. アシジでの召命担当者国際大会は、参考になる聖書的イメージとして、奇跡的におびたしい魚がとれたたとえ話を引用しました。シモン・ペトロがあらゆる計算と効率の論理に逆らって、ひたすらイエスの網を降ろしなさいとの御言葉に従った話しのことです。<sup>45</sup> 本会の召命司牧も、主の御言葉に信頼して行動し、再び網を降ろす必要があります。信頼して海に三つの網を降ろしましょう。三つの網とは、養成の網、福音宣教の網、兄弟愛の網のことです。

### 養成の網

16. 私たちの基本的な規律をまとめた「フランシスコ会の優先課題1997年(PrS)」は、このように述べています：「適切で明確な養成は、次のことの必要条件です。すなわち、私たちの生活と宣教の質と確実性を保証するため；各段階が明確に定義づけられ、一連の段階が一致しており、漸進性と一貫性のある養成の過程にそって、私たちの生活様式を、本会の若い志願者たちに効果的に伝えるため；今日の若者たちに向かってフランシスカン・カリスマを、彼らが具体的に魅力的と感じる方法で宣べ伝え、示す立場にある者のため。」<sup>46</sup>

この意味で、フランシスカン養成は福音に忠実でありながら、人間的、キリスト教的、フランシスカンの成長のダイナミックで統一のとれたプロセスであり<sup>47</sup>、兄弟共同体において、また現実の世界において行なわれる絶えざる回心の旅路である<sup>48</sup>ことが明らかです。各人は、共通の召命と個別の賜物を強化しながら、このプロセスに個人的に関わります。これらの要素は、召命司牧に特有の重要なものです。

---

<sup>45</sup> Cf. *Lk* 5, 1-11.

<sup>46</sup> *PrS* 5.

<sup>47</sup> Cf. *RFF* 44-54.

<sup>48</sup> Cf. *RFF* 41-44.

## 一般目標

次の目的をもって、召命の福音を告げ知らせること：

個人の尊厳を尊重すること；

聖霊の働きに従い、キリストのうちに生きるとの洗礼の招きに対して心を開き、応えるように彼を支えること；

共通の召命が実現し、具体化されるような個人的で固有の召命の賜物を認識できるように彼に同伴すること。そのような賜物は、小さき兄弟会によって、またその中で広められ、この変化の激しい時代に多様な文化的・社会的背景の中で福音を生き抜くようにとの招きである。

## 具体的な目標

養成と召命司牧とのつながりを深めること。この目的のためには、さまざまなプロジェクト（管区の、共同体及び個人の、召命司牧のための管区プロジェクトなど）が役に立ちます。小さき兄弟のアイデンティティーを内側から（*ad intra*）考察するためには、各プロジェクトの趣旨を明らかにすることが必要です。つまり、本会の優先課題を理解し<sup>49</sup>、召命の告知、提示、同伴、識別という段階を経ることによって外側から（*ad extra*）私たちの生活様式を提示して行くことが求められます。

個人に託された召命司牧の活性化から、召命のための兄弟共同体設立に移行するために管区内にFRVを設立するよう努力すること。兄弟共同体は、フランシスカン・カリスマをよりよく提示するだけでなく、同伴と召命の識別の過程において優れた教育的手段となり、兄弟的生活の養成の場となります。

50

召命の識別においてチームワークを奨励すること。その際、霊的生活の専門家と人文科学（心理学・教育学）の専門家との適正なバランスを保たなければなりません。そのようなチームは、信徒の協力を快く受け入れるべきです。

---

<sup>49</sup> Cf. *RFF* 104: 「召命のための司牧は、兄弟たちの生活によるあかしが、召命を求めているキリスト者にとって主要な魅力であることを、すべての管区兄弟共同体に自覚させる。」

<sup>50</sup> Cf. *RFF* 106: 「召命のための司牧は、フランシスカン・カリスマに関心を示す人々を歓迎するように、兄弟共同体を準備する。それによって『来て、見なさい』というイエスの招きに従って、彼らが一つの具体的な人生計画を見いだすためである。」

アニメーターのプロフィールを吟味すること。アニメーターは、同時に養成者としての役割も司牧的同伴者としての役割も持っています。それらの役割の基本的な特徴は、兄弟共同体と社会、特に絶えず変化を遂げる若者の社会との境界線上にあります。真正な養成者としてのアニメーターの重要性がもっと明らかになり、兄弟共同体によりよく受け入れられることが必要です。

召命司牧の管区アニメーターに適切な養成と同伴を保証すること。そのためには、管区レベルで召命司牧のアニメーターたちに同伴することを保証することが必要であり、傾聴と同伴と人間的・霊的識別を促すために、協議会レベルで、あるいは、社会・文化的分野で適切な講習を行なう必要があります。

人類の歴史を知ることができるように、召命のアニメーターを養成すること。それは現代の人々の旅路に同伴することによって可能であり、やがては文化を理解し、対話を奨励し、現実社会の中で召命の福音を告げ知らせることができるようになります。

教育的・霊的レベルで、若者たちの信仰の成長を図ること。このことはすべて、神の御言葉に触れ、個人的に祈り、秘跡を受けることによって徐々に成長してゆく中で神との生き生きとした関係を保つ生活に表れています。この成長に見られる教會的・共同体の側面は、特別な方法で大切にされなければなりません。それは、若者が情緒的な側面も含めて全人格的に関わるためです。

召命の同伴過程においては若者が主役であることを若者に自覚させること。そのためには、アニメーターは、自分の中に新たな独自の召命の賜物を持っている可能性のある若者の生活に注意深く耳を傾けることができなくてはなりません。この過程を経ることにより、若者は依存関係に陥ることなく、自己責任の感覚を養うことができます。

(召命の)提示の段階においては、会全体の召命の中で小さき兄弟のアイデンティティーをなす召命の深みに到達するよう配慮すること。然る後に、ふさわしい使徒職に導く(ブラザーの兄弟になるか、終身助祭の兄弟になるか、司祭の兄弟になるかなど)。

人文科学やその道の専門家の力を必要に応じて借りること。ただし、彼らがキリスト教的な価値基準を持ち、修道生活を知り、評価していることが前提条件です。それは、召命司牧のアニメーターとしてであれ、召命の旅路に出発する者としてであれ、本物の人間的成熟を目指すためです。

これらの要素の効力を判断し、上記の目標を管区レベル、地域レベルで、また、協議会レベルで徐々に達成する現実的可能性があるかどうか検討しなさい。

## 識別の基準

17. 養成綱領に提示されている志願者の識別基準<sup>51</sup>を知り、適用することは重要な任務です。これらの基準はアンジの国際召命担当者国際大会で承認されました。これらの基準は柔軟性のないものではありませんが、若者が自分を知り、自分が何をしたいのか、神は自分に何を求めておられるのかを知るのを助けるために、慎重に適用されなければなりません。これらの基準は、明確な要素に基づいて識別を行なおうとする養成者にとってなくてはならないものです。<sup>52</sup>

人間的成熟の識別基準。「妥当な精神的・肉体的健康」<sup>53</sup>は必要ですが、それ以外の、識別に当たり銘記しておかなければならない人間的成熟の基本的側面も挙げておきましょう。

- a. 情緒的成熟度は自己や他者、神との関係を育むバランスのとれた能力として判断されます。たとえば、  
自分の過去との和解、  
多様な個性を持つ他者の受容、  
神の超越性の認識。
- b. アイデンティティーと自己受容の感覚。自分の限界を知り、人生における悩みや苦しみを統合させながら、自分の個人的な体験をまとまりのある積極的な記憶として結びつける能力。
- c. 自分の人生に対する自由で自発的な責任感と家族との関係における自律性。
- d. 識別して、安定した選択をし、それをしっかり実践する能力。
- e. 感情と性的指向の完全な統合に向けて成長する可能性。志望者の総合的な人格の中でこれらの要素が果たす重要な役割を認識すること。

---

<sup>51</sup> *RFF* 116 and Appendix n. 1, besides the *GGB/FD*, 1.4-16b.

<sup>52</sup> Cf. *Vita Consecrata*, 65.

<sup>53</sup> *RFF* 116.

f. 奉獻生活に特有の「神が住まわれる」孤独な空間に生きる能力。その中で、全く感情を消し去った状態も、自然で完全な性もないということを学びます。<sup>54</sup>

g. 情緒的・性的分野を評価するのに必要な条件を以下に挙げてみましょう。愛されていると感じること。

友情と協力という積極的な関係を通して、愛する必要を感じる。自己中心を克服し、物質的なものから解放され、自分の衝動を抑え、兄弟共同体と共に、また兄弟共同体のために生きることを学びながら、徐々に自制して生きる能力。

自分の性の賜物を認識し受け入れると同時に、貞潔な独身生活に生き、成長することを望むこと。情緒的・性的分野に関する問題について、最近の教会の公文書が述べていることを参照することも必要に思われます。<sup>55</sup>

肉体的、心理的、知的、社会的、倫理的、靈的に自らを成長させる意思。

肉体労働に従事する心構え。

新しい価値観や、態度、考え方、体験などを寛大に受け入れること。異なる文化圏の人々を受け入れ、彼らと共に生き、対話し、働く能力。

男女を問わず、だれとも積極的な対人関係を築く能力。

困っている人々、特に、最も貧しい人々を、寛大な心、犠牲心、分かち合う能力を刺激しながら受け入れること。

h. 性的指向については、識別に必要ないいくつかの要素を挙げてみましょう。

しばしば性にまつわることではない情緒的な問題の原因に気づくよう、志望者を同伴すること。<sup>56</sup>

独身でもなければ結婚しているわけでもないというあいまいな「第三の」生き方を正当化するような妥協的生活に陥ることなく、自分の性癖や傾向を克服し、自己を統合するように志望者を同伴すること。そのような傾向を克服するということは、自発的な努力であると同時に、心、精神、意思、望みの中にある傾向についても徐々に自由になることでもあります。<sup>57</sup>さらに、これらの傾向が、次第に克服されて行き、やがて成熟した奉獻生活の条件を満たして生きる

---

<sup>54</sup> Cf. G. Bini, *The Order Today*, p. 38,

<sup>55</sup> Cf. *Potissimum Institutioni*, 39.

<sup>56</sup> Cf. *New vocations for a new Europe*, 37, IV, d.

<sup>57</sup> Cf. *Potissimum Institutioni*, 39.

妨げとならないことは重要です。

性的指向について正しい道を歩むように志望者を同伴すること。その際、この側面を過小評価したり、過度に強調したりすることなく、志望者が正しい知識を持ち、成長できるように助けることが大切です。

志望者がこの問題で混乱しないように助け、厳しい養成の旅路を通して成長するよう促すこと。

志望者の評価に当たっては、次のことに注意すること：

- 罪の意識がないか；
- 性的混乱状態が続いていないか；
- 未成年者に惹きつけられていないか。

このような評価は、異性愛者、同性愛者に関係なくすべての志望者に有効です。

このような体験をしている人々のための召命計画は奨励できません。なぜなら、調和のとれた成長と成熟の妨げとなる恐れがあるからです。

キリスト者としての成熟の識別基準。「召命のための司牧は、志願者の生育した環境が、必ずしも正しい信仰の生活を知り、実践する可能性を与えるものばかりではないことを考慮しながら、本会への志願者のカトリック信仰を注意深く配慮する（cf. Rb 2,3）」ものであるとすれば<sup>58</sup>、表面的な選択に同調しないためには、下記のようなキリスト者としての成熟の要素に注意を払う必要があります<sup>59</sup>：

- a. 神のみ旨を探し求め、行なう意思。
- b. 祈ろうとし、神を中心に生きる人となろうとする意思。
- c. 定期的に秘跡を受け、御言葉について省察し、イエスに従おうとする真剣な献身によって育まれたイエス・キリストとの個人的な関係。
- d. 言葉と行動に具現される生きた信仰。
- e. カトリックの信仰と道徳の意義および教会への愛を理解し、それらに忠実であること<sup>60</sup>。

---

<sup>58</sup> RFF 108.

<sup>59</sup> Cf. Appendix RFF 2 and FD 1.4.14b.

<sup>60</sup> Cf. RFF 108: 「召命のための司牧は、志願者の生育した環境が、必ずしも正しい信仰の生活を知

- f. 自分の生活、教会、世界における神の現存とその救いの御業に気づくこと。
- g. 自らも福音化されると同時に福音宣教しようとする意思。
- h. 預言的、宣教者的、そしてエキュメニカルな精神。

フランシスカンとしての成熟の識別基準。フランシスカン生活にふさわしい諸条件<sup>61</sup>は、識別作業に必要な基準と考えられています。識別の基準となるフランシスカンとしての成熟の要素<sup>62</sup>とは、下記のような生活を送る能力のことを指しています：

- a. 聖フランシスコの精神に従い、絶えずキリストと福音的生活に心を向けることによって表現される悔い改めの生活；
- b. 平和で謙遜な心と幸せで礼儀正しい精神によって特徴付けられた小さき兄弟の生活；
- c. 他者と兄弟として生き、大きなフランシスカン家族を抱きしめ、すべての人と兄弟のようになれる能力の中に表現された兄弟的生活；
- d. 自分の召命を愛し、自分の召命による選択に基づいて愛する生活；
- e. 祈りと献身の精神に育まれた生活；
- f. 他者のために仕え、働こうとする奉仕の精神と善意に満ちた生活；
- g. 貧しく質素な生活と貧しい人々のために働こうとする意志；
- h. 正義と平和の生活；
- i. 被造物および自然環境を神の現存の表れとして愛し、尊重する心に鼓舞された生活；

---

り、実践する可能性を与えるものばかりではないことを考慮しながら、本会への志願者のカトリック信仰を注意深く配慮する（cf. Rb 2,3）」

<sup>61</sup> Cf. *GGCC* 1; cf. G. Bini, *The Order Today*, p. 15.

<sup>62</sup> Cf. Appendix *RFF* 3.



j. 観想的態度に基づいて営む個人的、共同体的、職業的生活。

識別基準は、本会が置かれている地理的・文化的現状を心に留めながら適用される必要があります。この基準の意を汲み、適用することに取り組むのが重要です。

管区および地域レベルの兄弟共同体でこの旅を続けてゆくために

18. 「優先課題 1997年」の第5章と「PCV総括文書2000年（LGB/FD）」の第1章に示されている提案事項をすべて読むことをお勧めします。それだけでなく、決意を行動に移すことを容易にするために、いくつかの質問と提案を次に述べたいと思います。

#### 質問

召命の受容と同伴という観点からフランシスカン・アイデンティティを深めるために、地域及び管区の兄弟共同体でどのような養成的援助が必要であり、また可能ですか？

召命司牧と生涯養成（OF）の間で協力し、調和を図ってゆくためにどのような具体的な方法がありますか？

召命司牧のアニメーターが召命の識別の分野で養成者としての任務を適切に遂行することができるためには、どのような養成的援助が必要であり、また可能ですか？

召命の識別の旅路を始めようと私たちを訪れる若者が、自立した責任ある主体として私たちの生き方を選び取るのに必要な人間的、キリスト教的、フランシスカンの成熟と遂げることができるように助けるためには、どのような養成的援助が必要であり、また可能ですか？

#### 提案

私たちの現在の神学と司牧活動がどのような召命を生み、その召命が教会および本会の生活にどのような影響を及ぼすことになるかを自分に問うてみることを。

召命の受容と同伴という観点から、個人及び共同体の養成のための評価の目標、内容、手段と時間を、個人として、共同体として、また管区としてのプロジェクトの中で明らかにすること。

### 福音宣教の網

19. 「最近の数十年間、私たちのアイデンティティーを内省した結果、私たちは、昔のルーツ、すなわち、私たちは兄弟的共同体であり、しかも福音宣教する兄弟的共同体であるということをもう一度自分のものにするようになりました。これが私たちの召命であり、教会及び世界における私たちの存在理由です。今日私たちに求められる預言的振舞いは、聖フランシスコによって小さき兄弟会に委ねられたこの貴重な宝を伝え残す行いです。私たちの役割は、兄弟としての証しを行い、『善きもの、非常に善きもの、至上に善きもの、生ける真の主なる神』を知らせることです。」<sup>63</sup>

私たちは、全教会の使命の中で、また教会との生きた預言的交わりの中で、福音宣教することの必要性を認め、この召命を具現するように招かれています。<sup>64</sup> この宣教は、方法、精神、手段、情熱において新しいものであるべきです。また、この宣教が特に目指すのは、「イエスのご生活の証し、それも、イエスの御名のみによって結ばれ、支えられた2～3人の兄弟的共同体から鏡のように映し出され、感じ取られるイエスのご生活そのものを証しすることです。」<sup>65</sup>

福音宣教の網はまた、私たちの福音宣教の主要な方法である本物の兄弟的共同生活というもっとも透明な水の中で魚を捕るために深く降ろす必要があります。したがって、「神と歴史の中心に根ざして生きているこの画期的な時代の流れの中で、私たちは、私たちの生活の質と私たちのプロジェクトの重大さを守りつつ、私たちの生きているこの瞬間を恵みの時に変えるように神からも人類からも求められているのです。私たちの祈りの生活がダイナミックで創造的なものになり、兄弟的共同生活が福音の生きた細胞、すなわち

---

<sup>63</sup> PrS4.

<sup>64</sup> Cf. *Lumen Gentium*, 44b: 「福音的勧告はそれらを実践する者をその目的である愛を通して、教会とその秘義に特別な方法をもって結び合わせるものであるから、かれらの霊的生活は全教会の善を旨とするものでなければならない。それゆえ、自分の召命の様式に従い力を尽くして、祈りと積極的な活動とをもってキリストの国を人々の魂の中に植えつけ固め、それを全地に広めるために努力する義務が生ずる。このために教会も、さまざまな修道会の固有の性格を保護し支持するのである。」

<sup>65</sup> Definitory General, *Letter for the Solemnity of St. Francis 1999*, in "Acta Ordinisi", III (1999) 252-254.

神と人々との出会いの場となるためには、まだまだ長い道のりがあります。」

66

召命司牧の特徴についてですが、どうすれば証しによる宣教が特別な召命の旅路となれるのかを知ることは興味深いものです。御言葉を伝え、典礼や隣人愛を実行するための教会のルートは、召命の提示と同伴に関する証しによる宣教の場がたくさんあるように、さまざまです。司牧の旅路から自分の召命に気づくまでの心の動きに気配りする必要があります。貧しい人々の存在と彼らへの奉仕を優先し生き抜く兄弟的共同体は、この重大なステップを奨励します。<sup>67</sup> 私たちは、大胆な宣教精神、つまり、現代の人々の中に入ってゆく勇気を再発見するように招かれています。<sup>68</sup>

私たちの管区では、養成の時と福音宣教の時との関係に配慮することが大切です。それは、召命司牧における養成と福音宣教という二つの側面の健全なバランスを保つためです。特に、召命司牧と青年司牧のダイナミックな協力関係を深め、育むことが必要です。

#### 一般目標

福音化されながら、福音化するという兄弟的共同体のアイデンティティーを、下記の目的で目に見える説得力のあるものにする：

- \* 私たちの証しの質を通して、召命の美しさを告げ知らせる場となるために；
- \* さまざまな宣教の方法や場 ( in the diverse places and areopaghi of the mission ) を通して、福音宣教の明確な選択を行なうために。

#### 具体的な目標

小ささ、貧しさ、連帯においてより本物の兄弟的共同生活を営むこと。

---

<sup>66</sup> *Ibid.*

<sup>67</sup> Cf. H. Schaluck, *Fill the Whole Earth with the Gospel of Christ*, n. 48: 「ここで、私たちは福音に根ざし、観想の深い経験によって生まれ、兄弟性の中で生き抜かれた私たちの召命の核心を考えてみましょう。私たちはまた、ここに福音宣教の中心を見いだします。」

<sup>68</sup> Cf. John Paul, II, *Discourse to the Franciscans of Missione al Popolo*, Rome, 15.11.1982: "Go, you who are the brothers of the people, into the heart of the masses, to that abandoned and exhausted crowd like sheep without a shepherd, for which Jesus felt compassion... Go you also to the men and women of our times! Do not wait for them to come to you! Try to reach them! Love spurs us to it... The entire Church will be grateful to you for it".

それは、本会の会則や会憲、優先課題に示されているような明確なアイデンティティーに基づいて福音化し、小さき兄弟の召命を徹底的に証しする兄弟的共同体を築くことができるためです。

私たちのカリスマは決して目標ではないことを自覚すること。それは、教会のために教会の中にあるものであり、全体の一部であって全体ではないのです。このことは、教会の使命、神の民、交わりの神秘に与るために極めて重要です。

私たちの福音宣教活動を神の慈しみの体験及び「祈りと献身の精神」の成長と優位性に根づかせること。私たちの存在基盤はその精神の上になければならないからです。<sup>69</sup>

召命司牧を地域教会との有機的な交わりの中で日常的な司牧活動に組み入れることの重要性を認識すること。その際、青年司牧や他のフランシスコ会、信徒、青年たちと協力することが大切です。このようにして、召命の文化の福音化と自分の道について「主よ、私に何を御望みですか」という問いをすべてのキリスト者、および共同体に対する重要な質問として引き受けることが可能となります。

交わりの精神を促進すること。人間やキリスト者を養成する場、祭壇の奉仕者、奉獻生活者、司牧活動に従事する者を教育する場、家族や共同体を築くすべての場で、この精神が教育的原則として表れるようにすることが大切です。<sup>70</sup>

霊のすべての賜物が働ける場をつくること。その際、兄弟会においても、世界や教会においても、画一性を求めず、むしろ多様性を調和させることが大切です。そうすることによって、あらゆる召命を告げ知らせ、促進することが可能となります。

召命司牧を管区の福音宣教活動に組み入れるよう奨励すること。その際、私たちのカリスマ（人々への宣教、海外宣教活動、正義と平和、など）とより調和した形態をとるように努めることが大切です。

召命の告知（vocational annunciations）洗礼を受けた人だれもが召され

---

<sup>69</sup> Cf. *The Heart turned towards the Lord*, Document on the contemplative dimension of the Franciscan life, in *Acta Consilii plenarii OFM di Malta*, 1995, 180-190.

<sup>70</sup> Cf. *Novo Millennio Ineunte*, 43.

ているという恵みを告げ知らせること)において、小さき兄弟及び兄弟会全体の宣教者としてのアイデンティティーに特別の注意を払いながら、私たちの兄弟的共同体の国際的な側面を強化すること。<sup>71</sup> これを实践するにあたり、召命の告知と提示において、私たちの存在と行動の側面が不足することのないようにしなければなりません。このようにして、兄弟的共同体はこれらの側面を再発見し、再活性化させるように求められているのです。

地域兄弟共同体の固有のアイデンティティーを強化すること。その際、フランシスカン・カリスマのさまざまな側面を福音化するように、そして、聖霊によって集められ、イエスに従う道を迎えるように導かれた使徒的兄弟共同体固有のさまざまな要素を具現するように配慮しなければなりません。(たとえば、隠遁所及びイエスと共に祈る体験；福音宣教する兄弟共同体及びイエスと共に福音を宣べ伝える体験；病人や貧しい人のために働く兄弟共同体及びイエスと共に病人や貧しい人の世話をする体験；小教区の兄弟共同体及びイエスと共に神の民を愛する体験など。)

召命(神に召されている)という福音を明確に告げ知らせる責任において成長すること。その際、単純な表明の形式に留まることなく、召命という福音の美しさと本質を、フランシスカンに馴染みのない若者たちにまで伝える能力を育むことが必要です。

すでにある組織や手段の使い方を見直すこと。それは、それらが私たちの伝えるメッセージや私たちが推し進め、提示している生活様式に反するものとならないようにするためです。

慈善行為の福音的価値を、預言的勇気をもって告げ知らせること。すべての人々、特に貧しい人々に対する具体的な愛の行為を实践することによって。大切なのは、特に社会的な弱者である若者たちに対して、召命の告知と提示と識別を行なう場の問題です。

マスメディアの新しい言葉と手段を大いに利用すること。それは、召命の福音的価値を広めるのに役に立ちます。ただし、小さき人々や貧しい人々のために働き、最も小さき人々と連帯する人々を優先するように心がけることが大切です。

フランシスカン・カリスマをよく知り、それをもっと信念と勇気をもつ

---

<sup>71</sup> Cf. G. Bini, *Letter to the international Council for Missionary Evangelisation*, 10 July 1999.

て信徒と積極的に分かち合うように心がけること。召命司牧において信徒と協力する大胆で預言的な形があってもいいと思います。

召命につながる教育を優先するような教育の場を作ること。たとえば、家族、小教区、団体、運動など。

若者たちを福音化すること。勇気をもって、貧しい人々、フランスカンに馴染みのない人々、移民たちに働きかけること。たとえば、大学とか一般的な文化の分野の人々、教会の様々な運動をやっている人々の所に赴き、若者たちの訴えに耳を傾けること。その際、今日彼らを取り巻く文化環境を考慮に入れ、彼らが生活を統合し、召命という視点から自分の人生の責任を引き受けることができるように彼らを同伴することは大切です。

文化圏、特に働いている文化圏を福音化すること。それは、まことの正しい「召命の文化」が次第に、多様な文化と調和しながら認められるためです。<sup>72</sup>

さまざまな地理的文化的状況において、東方教会や異なる教会共同体、他の宗教との会合や対話を持つように心がけること。<sup>73</sup> それは、世界にはさまざまな文化があること、そして、人の移動によって文化交流が可能であることをよりよく理解するためです。

家族を福音化し、彼らと協力すること。それは、福音化された家族が人間の成長を助けるような環境となり、子供たちが召命において人生を選択することができるよう助けるためです。

召命司牧のための管区プロジェクトは、上記の要素を考慮に入れ、福音宣教の要素とも調和のとれたものであるべきです。

管区及び地域の兄弟共同体でこの旅を続けてゆくためには

---

<sup>72</sup> Cf. Pontifical Council for Culture, *Towards a Pastoral Approach to Culture*, n. 38 and H Schaluck, 「地上をあまねく福音で満たすために (*Fill the Earth with the Gospel of Christ*)」, from n. 175, where some “guiding elements for the evangelizing activity, which we try to take care of constantly as Friars Minor according to the diversity of places and situations” (n. 133) are indicated.

<sup>73</sup> *Ibid.* and cf. The General Chapter of Medellin 1971, which invited us to “personally” the Franciscan life in the culture of the local Church and the General Chapter Assisi 1997, which reminded us of “...discovering the diversity of faces and cultures”.

20. 「優先課題 1997年」の第4章と「PCV総括文書2000年（LGB/FD）」に書かれていることをお読みください。ここで質問し、提案するのは、個人、共同体、管区の各レベルでそれぞれの召命に応じた福音宣教の網を降ろすのを助けることを目的としています。

### 質問

私たちのカリスマが個人の生活や地域・管区レベルの兄弟共同体生活の中にはっきりした形で示されるとしたら、それはどのような側面ですか？また、私たちのカリスマが影をひそめている場合、再びそれがはっきり目立つように育まれなければならないとしたら、それはどのような側面ですか？何らかの手段や組織を通して、言葉で示すことと行動で証しすることとを比較しなければならないとしたら、どのような矛盾したメッセージを与えることになると思いますか？

私たちは召命において、若者たちや家族の世界を福音化するために、どのようなイニシアチブをとっているのでしょうか？強化しなければならないのはどのようなことでしょうか？どのようなイニシアチブ、手段、協力によればよいのでしょうか？

管区計画において、最も広い意味の福音宣教に召命司牧を効果的に組み入れるとはどういうことですか？

管区第一主義に陥らないために、また、召命の告知において（in the key of vocational announcement）会の国際性を高めるために、管区間でどのような協力体制を強化すればよいのでしょうか？近い将来を考えた場合、どのようなイニシアチブが望ましいのでしょうか？

### 提案

接触するさまざまな人々に対して召命の告知を行なう場合に、努力目標を個人、共同体、管区それぞれのプロジェクトに明記しなければなりません。

評価を受ける人（addressees）、評価の目的、基本的な内容、方法や手段、時間については、「告知・提示・同伴」計画に従い、召命司牧の管区プロジェクトに明記されていなければなりません。

## 兄弟愛の網

21. 「私たち小さき兄弟会は、福音と主イエス・キリストのみ跡に、より忠実に従うことに専心しています。そして、私たちは兄弟的共同体に組み込まれると同時に兄弟的共同体そのものでもあります。このことには、次のような意味が含まれています。 - 私たちは賜物として兄弟を持つ恵みが与えられた；私たちは、兄弟的共同体をとおして十全的人間として、キリスト者として、そしてフランシスカンとしての成熟に達することにより、人間の、そしてキリスト教の価値を高めている；私たちは、自分を神に委ね、貧しき者、十字架にかけられたキリストに従う者となる；私たちは「主イエス・キリストのみ言葉と聖霊のみ言葉」を歓迎する；私たちは福音を知らせに行くための招きに耳を傾ける。 - これらの意味の故に、私たちの生活と使命の実践的な方向付けが兄弟的共同体から湧き出なければならないのです。」<sup>74</sup>

上記のことに関連して、私たちは、「兄弟的生活が愛における分かち合いの生活として理解されており、教会的交わりの印象的なしるしである」<sup>75</sup>ことを認識しております。真正な兄弟的生活というものは、このような大きな尺度で営まれるものであり、自己陶酔的な兄弟愛に閉ざされることなく、教会と世界に向けて幅広く開かれるものなのです。<sup>76</sup>

これらの理由から、兄弟的共同体は、さまざまなレベルで召命の提示と同伴の最も重要な位置を占めています。管区の兄弟的共同体は、この職務に招かれた人、つまり、召命のアニメーターに対して、適切な養成とフランシスカン生活への召命を受け入れ育むのに必要な組織を提供する義務があります。各地域の兄弟的共同体は、その日常生活と宣教活動を通じて召命を育む場なのです。<sup>77</sup>

---

<sup>74</sup> PrS2.

<sup>75</sup> VC 42.

<sup>76</sup> Cf. *Civciswa, Fraternal Life in Community*, 10: "Religious community is a visible manifestation of the communion which the foundation of the Church and, at the same time, a prophecy of that unity towards which she tends as her final goal".

<sup>77</sup> Cf. *RFF* 110-112; *Ongoing Formation in the Order of Friars Minor*, 48-51.



## 一般目標

下記のことを目標にして、兄弟的生活の質を絶えず高めてゆくこと：

- 兄弟的共同体を召命の提示と同伴のための重要な場として生きること；
- すべての兄弟が召命司牧に関わるように働きかけること；
- 新しくて意味のある兄弟的生活の様式を生み出すこと；
- 管区間及びフランシスカン家族間の交流と協力を促進すること。

## 具体的な目標

兄弟的生活の質を向上させること。その手始めに、会則、会憲、フランシスコ会の優先課題に明記されたすべてのことを確信して実行すること。そのためには、カリスマを今日的な意義のあるものにするという兄弟的共同体の中にすでに存在する積極的な側面を明らかにし、それらを発展させることが不可欠です。そして、私たちは悔い改めるよう招かれているのであるから、欠けたところがある事を落ち着いて認めることが大切です。兄弟的共同体における交わりの生活の中で再教育されることがないならば、私たちの独特のカリスマを若い人々に伝えることはできませんし、また、彼らに「来て、見なさい」との召命的な体験を提供することもできません。

代表者を選ぶという考え方を改め、地域及び管区のすべての兄弟が召命司牧に関わるよう奨励すること。その際、すべての兄弟が召命のために祈り、それぞれの兄弟的共同体がその独特な生活と使命に基づいて召命を受け入れるように鼓舞することが大切です。そうすれば、兄弟的共同体においてフランシスカン・カリスマの独特な側面を体験するチャンスを与えることができます。年をとった兄弟や病気の兄弟は、フランシスカン生活を証しするための賜物であり、ないがしろにされてはなりません。

敢えて兄弟的共同体として住むべき地域や環境を明確にすること。この場合、兄弟的共同体は、今日の人間関係が複雑で多様化したポストモダンな社会において重要な役割を果たすことができなくてはなりません。それは、若い人々に兄弟生活の体験のチャンスを与え、彼らが神や兄弟たちとの本物の分かち合いと自己奉獻の関係を築くことができるよう助けるためです。

会の中で兄弟的共同体の重要な体験を伝え合うことを奨励すること。特にインターネットを通じて行なえば、世界に広がる兄弟的共同体に属しているという意識を深めることができますし、会の将来をより大きく、より効果的な国際化に向けて開くことができます。

管区間、協議会間、及び会レベルの協力を推進すること。これは、プロジェクトや資料の交換、活動や養成における共通のイニシアチブの実践、養成の教材の作成や情報の分かち合いを通して行なうとよいでしょう。そうすれば、気まぐれな現代の若者たちに対処することができますし、視野の狭さを克服することができます。

クララ会や在世フランシスコ会、ヤング・フランシスカンとのカリスマ的な結びつきを検証すること。これらの結びつきは相互尊敬によって成長し、私たちのカリスマ的な賜物の分かち合いを可能にします。

他のフランシスカン家族との協力体制を築くこと。これは、フランシスカン・カリスマの単一性を表明するためです。また、若者の問題や召命の司牧的活動、靈的同伴の問題などにおいて私たちの協力を必要とする教会グループや運動との協力体制を築くことも大切です。しかしながら、そのような協力は、自分のアイデンティティーと他者のアイデンティティーを尊重しながら行なわれなければなりません。

教会の様々な運動やグループと会合を持ち、協力する方法を探ること。偏見を持たずに、彼らの要求やチャレンジを受け入れることが大切です。

召命を受け入れるための兄弟的共同体（FRV：Fraternities for the Reception of Vocation）を各管区の中に設置すること。アシジの召命担当者国際大会で出された指示に従い、管区の執行部は、管区の召命司牧アニメーターとFRV設置予定の修道院の院長、兄弟たちとの間に効果的な協力が可能であることに留意すべきです。特にFRVのメンバーは、下記のことをもたらすために、絶えざる回心が求められています：

- a. 対話、信頼、共感、体験の分かち合いに満ちた本当の家庭的な雰囲気；
- b. み言葉に耳を傾け、パンを割くミサと「教会の祈り」のために集まった兄弟たちの靈的生活に対する深い配慮；
- c. 小ささと福音宣教の次元における会の選択と指示に基づいた預言的な成果（*prophetic achievements*）をあげることを重要視する態度；
- d. 具体的な家事の分担（台所、掃除、労働作業、祈りの準備など）；

- e. 若い人々をその感性、要求、人間的・靈的期待をも含めて適切かつ寛大に受け入れること。

兄弟的共同体の地域プロジェクトの中に召命司牧を有機的に組み入れるよう推進しましょう。

FRV に関しては、特定のモデルを絶対視しないようにしながら、さまざまな表現方法に必要な注意を払いましょう。

管区及び地域の兄弟的共同体における旅を続けるために

22. 「優先課題 1997年」の最初の第3章と「PCV総括文書2000年（LGB/FD）」の第3章に書かれていることとお読みください。以下に述べる質問と提案は、現代において小さき兄弟であるために必要な網、つまり兄弟愛の網を降ろすのを助けることを目的としています。

### 質問

兄弟的生活のどのような側面がすでに私たちの地域や管区の兄弟的共同体の中に見られますか？私たちの兄弟的共同体を特徴付ける長所とは何ですか？優先課題に照らして見て、どのような刺激をこれらの側面に与えることができますか？

フランシスコ会の優先課題に照らして考えた場合、現代の若者たちに兄弟愛を体験させ、主との出会いが体験できるような環境を提供するためには、私たちの兄弟生活のどのような側面を再訓練しなければなりませんか？フランシスカンとしての召命に応えて、人生の意味を見つけ、その選択にふさわしいサポートを得るために、適切な同伴を受けることは大切です。

兄弟的共同体に属しているという感覚を表現し、私たちのアイデンティティーと召命の根本である兄弟的共同体の側面をよりよく表現するためには、どのような協力が必要ですか？

クララ会、在世フランシスコ会、ヤング・フランシスカン、及びその他のフランシスカン家族との協力体制で、すでに出来上がってい

る形態はありますか？また、これから促進すべき形態とはどのようなものですか？

### 提案

私たちの兄弟的共同体を召命の受け入れという観点から定義づけるためには、祈りと献身の精神や、兄弟的生活における交わり、小ささ、清貧、連帯といった分野で実行すべきことがらをすべて、個人、共同体、管区のそれぞれのレベルのプロジェクトに明記しなければなりません。

召命司牧のための管区プロジェクトの中でFRVとなるべき修道院を明確に提示すべきです。また、管区内の各兄弟共同体に見られる生活の重要な側面や宣教する使命についても具体的に明記すべきです。それは、自分の召命を探し求めている若者たちに兄弟的共同体が実践されている状況の豊かさと多様性を体験するチャンスを与えるためです。

召命の司牧的配慮のためのオリエンテーション

「来て、見なさい」(Jn 1:39)

発行日：2004年7月15日

発行者：106-0032 東京都港区六本木 4-2-39  
フランシスコ会日本管区

電話 03-3408-8088

FAX 03-3401-3215

info@ofm-j.or.jp